

新田遺跡ほか

新田遺跡第140次調査

新田遺跡第143次調査・山王遺跡第222次調査

市川橋遺跡第100次調査

高崎遺跡第124次調査

令和3年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡をはじめ、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在し、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、令和2年度に受託事業として実施した5件の発掘調査の成果を収録したもので、新田遺跡の南宮庚申地区の調査では、10世紀前葉以前の畝跡を発見しています。また、高崎遺跡では、近代の送電線基地の跡を調査しました。

広大な遺跡範囲に対し、調査面積はごくわずかですが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和3年3月

多賀城市教育委員会
教育長 麻生川 敦

例　　言

- 1 本書は、受託事業による令和2年度に実施した発掘調査5件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数值における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 插図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は小原駿平、齋藤健、佐藤純平が行い、本書の編集は大木丈夫が行った。
I・IV・V：大木丈夫　II・III：佐藤純平
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	新田遺跡第140次調査	3
III	新田遺跡第143次調査・山王遺跡第222次調査	40
IV	市川橋遺跡第100次調査	49
V	高崎遺跡第124次調査	63

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 麻生川 敦
- 2 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 伊藤 文昭
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
副主幹 斎藤健 研究員 大木丈夫 大場正善 技師 佐藤純平
- 4 調査協力者 株式会社ホットハウス 株式会社フタバ不動産 株式会社福互
株式会社斎藤工務店 スモリ工業株式会社
- 5 調査従事者 浅井知恵 伊藤茂 遠藤光 大塚芳弘 大根田満 加藤勝二 加藤浩 叶内正悦
工藤正好 佐々木勉 佐々木正則 佐藤道子 佐藤由紀子 清水泰昌 菅原正義
鈴木優子 濱戸口弘行 濱戸嶋修 武田進 但野順子 藤村孝行 古瀬律子
幕田裕子 三上嘉昭
- 6 整理従事者 有路尚子 石垣玲子 浦山紀以子 奥田美雪 菊池あかね 佐々木直美
佐々木宣子 佐藤ゆかり 高橋明子 千葉貴久江 千葉都美 長瀬真貴子 秦千尋
堀川紀子 宮城ひとみ

調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第140次	多賀城市南宮字庚申228番	令和2年4月20日～6月30日	1,512m ²	斎藤・佐藤
2	新田遺跡第143次	多賀城市山王字松島原1番1他2筆、 山王字三千刈1番4	令和2年6月10日～9月4日	522m ²	斎藤・大場・ 佐藤
3	山王遺跡第222次	多賀城市山王字三千刈1番1他1筆	令和2年6月10日～9月4日	795m ²	斎藤・大場・ 佐藤
4	市川橋遺跡第100次	多賀城市市川字館前地内	令和2年7月6日～8月19日	42m ²	斎藤・大木
5	高崎遺跡第124次	多賀城市留ヶ谷一丁目231番1外	令和2年6月1日～6月23日	145m ²	大木

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S B : 据立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 壁穴住居跡 S K : 土坑
ピット (P) : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構
- 2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。
 - (1) 土師器坏

A類: ロクロ調整を行わないもの
B類: ロクロ調整を行ったもの

B I 類: ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの
B II 類: ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの
B III 類: ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの
B IV 類: ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの
B V 類: ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I ・ B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り(糸切り)によるものをcとして細分する
 - (2) 土師器甕
 - (3) 須恵器坏
- 3 本文中で用いている「灰白色火山灰」とは、東北地方に広く降下した広域火山灰である。その降下年代に関しては、915年とする説(町田洋「火山灰とテフラ」日本第四紀学会編『日本第四紀地図』1987年、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991年)と、907年から934年の間とする説(宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』1998年)に見解が分かれている。前者は『扶桑略記』(裏書)延喜15年(915)7月13日条の「出羽国言上、雨灰高二寸、諸郷農桑枯損之由」の記事を火山灰降下記事とする理解である。後者はこの火山灰が、907年伐採の木材を使用している秋田県払田柵跡外郭線C期角材列の存続中に降下していることから907年を上限とし、承平4年(934)に焼失した陸奥国分寺七重塔(『日本紀略』同年閏正月15日条)の焼土層に覆われていることから934年を下限とする説である。近年、915年説を評価するものも見られる(小口雅史「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山(長白山)を中心に—」、笹山晴生編『日本律令制の展開』吉川弘文館、2003年)。本書では、これらの研究成果をもとに、10世紀前葉に降下したものと理解する。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市的地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に延びている。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤跡も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmである。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmである。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約60軒の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で発見され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。



第1図 調査地点の位置

1: 新田塚跡40次調査 2: 新田塚跡第140次調査 3: 市川塚跡第100次調査 4: 高崎塚跡第222次調査

II 新田遺跡第140次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字庚申228、229-2、230、231、295-1、298、300、301番地における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。平成31年2月5日に地権者より当該地における宅地造成と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では、約6,000m²の敷地に幅6.0mの道路を建設して宅地24区画を造成するもので、道路部分では現地表に最大1.3mの盛土を行い、区画ごとの擁壁設置工事では最大で0.8m、上水道管敷設工事では幅1.0m、深さは最大で1.8mの掘削を行うというものである。東側隣接地を対象とした平成23年の第76次調査では、現況から0.8mの深さで遺構を検出しており、今回の工事計画による遺構への影響が懸念された。

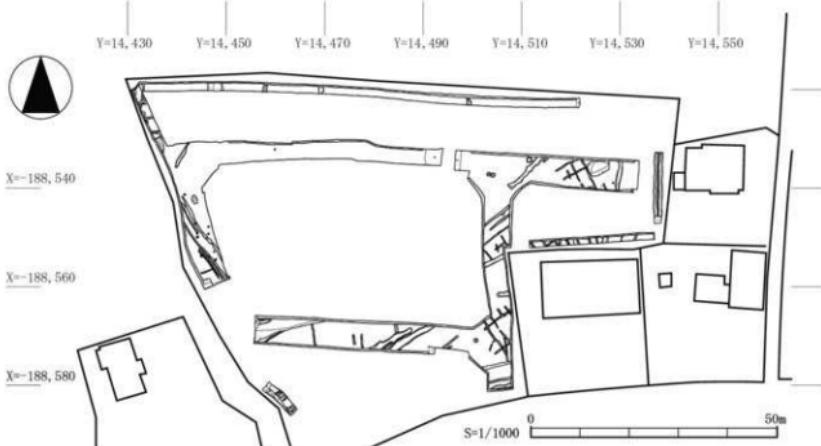
このため、工法変更による遺跡を保存する協議を行ったが、提出された工法以外には十分な地盤強度が得られないことから、発掘調査を実施することとなった。

令和元年8月6日、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、本発掘調査を実施するために令和元年8月27日から9月7日にかけて確認調査である新田遺跡第136次調査を実施した。この調査で道路建設予定地のほぼ全域においては主に古代の溝跡などを確認した。その後、調査計画について事業者との合意に至ったことから、令和2年3月2日より本発掘調査に着手した。

まず調査区を東西に分け、東側から重機による表土掘削を開始した。現地表下0.7m～1mの所で遺構検出面を確認し、東側の表土掘削が完了した3月19日で一旦、調査を終了した。



第1図 調査区位置図

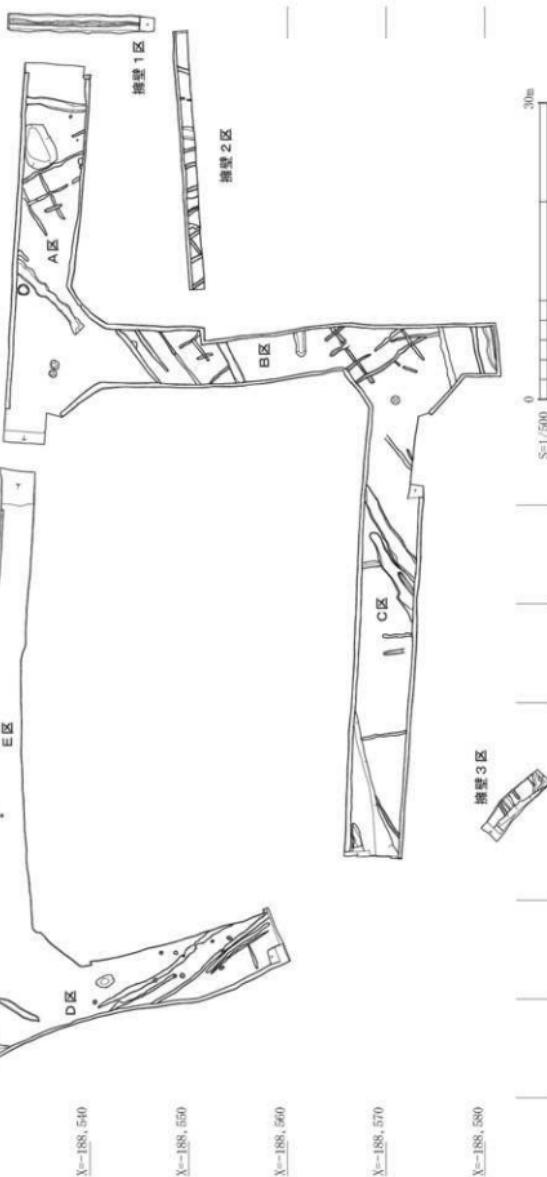


第2図 調査区配置図

X=188, 530
Y=14, 430 Y=14, 440 Y=14, 450 Y=14, 460 Y=14, 470 Y=14, 480 Y=14, 490 Y=14, 500 Y=14, 510 Y=14, 520 Y=14, 530



X=188, 540



第3図 調査区全体図

その後、4月20日より令和2年度の調査を開始し、C区（第2図）から遺構確認作業を開始した。5月7日にA区までの遺構検出作業、全体写真撮影を行った後にA区から遺構掘削作業、遺構の平面図・断面図作成、写真撮影を行った。5月15日からはそれと並行して調査区西側の表土掘削作業、調査区東側の調査が完了した地点の埋め戻し作業を開始した。6月1日より表土掘削が終了した調査区南側のD区より遺構確認作業、全体写真撮影を開始した。続けて遺構掘削作業、遺構の平面図・断面図作成、写真撮影を行い、6月30日までに埋め戻しを含む現場作業の全てを終了した。

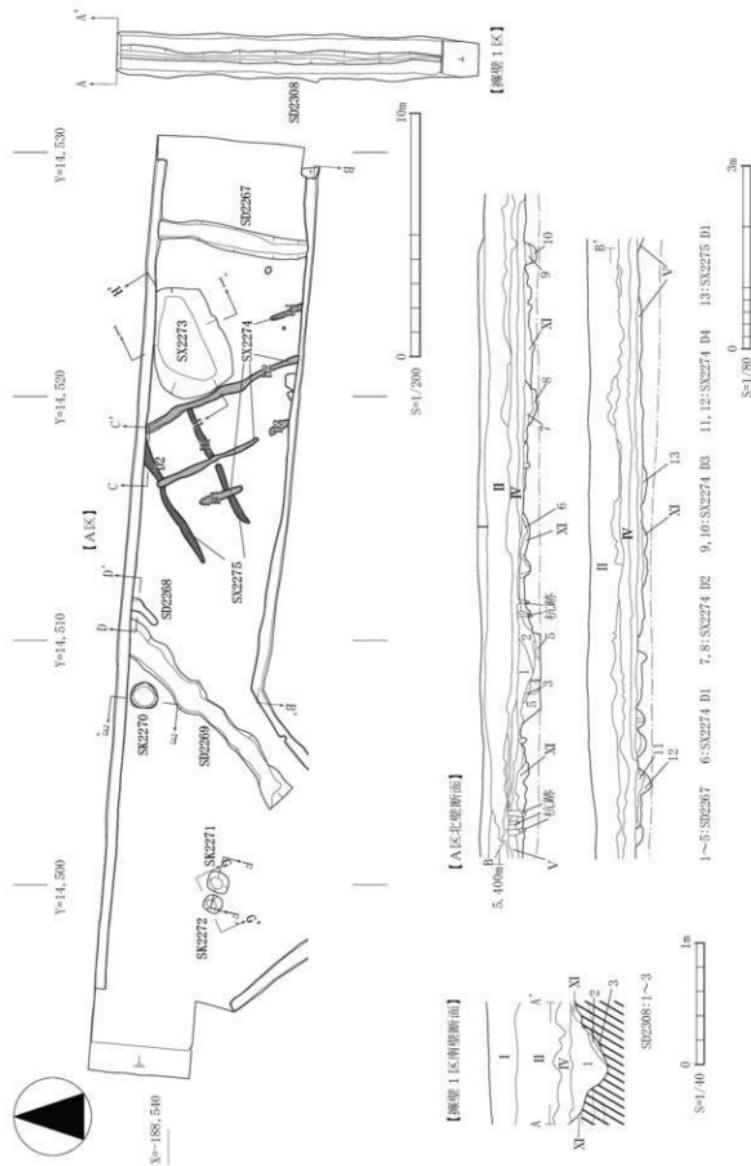
2 調査の成果

（1）層序（第4図）

- I層：現代の表土層で、灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。厚さは約10～40cmである。
- II層：A区と擁壁1区で確認した、現代の地盤改良のために埋められたにぶい黄色の砂礫（2.5Y6/4）である。厚さは約20～60cmである。
- III層：B区、擁壁2区で確認した現代の盛土で、にぶい黄褐色（10YR5/3）シルトである。厚さは約10～50cmである。
- IV層：A区、B区、D区、擁壁1区、擁壁2区で確認した現代の水田耕作土で、褐灰色（10YR4/1）シルトである。厚さは約10～40cmである。
- V層：A区で確認した。褐灰色（10YR4/1）シルトである。厚さは約10cmである。
- VI層：B区で確認した、古代の遺構を覆う堆積土である。この層の下層が遺構検出面となる地山層である。
- 5層に細分できるが性格が同じであるため1層にまとめた。灰色シルトが主体で一部に灰白色火山灰のブロックが混じる。厚さは約30～40cmである。
- VII層：C区で確認した、古代の遺構を覆う堆積土である。この層の下層が遺構検出面となる地山層である。灰白色シルト層であり、約2cmの灰白色火山灰のブロックを全体的に含む。土色の僅かな違いから2層に細分できる。厚さは約10～15cmである。
- VIII層：D区で確認した褐灰色（10YR4/1）シルトである。厚さは約10cmである。
- IX層：D区で確認した。古代の遺構を覆う堆積土である。この層の下層が遺構検出面となる地山層である。
- D区北側では4層に細分できる。D区南側では灰オーリーブ色（5Y4/2）シルトで、D区北側では黒褐色シルトから灰色シルトである。厚さはD区南側で約10cm、D区北側で10～20cmである。
- X 1層：C区で確認した灰色シルトが主体の層であり、その上面が古代の遺構検出面となっている。4層に細別できる。厚さは約20～30cmである。
- X 2層：擁壁2区で確認した暗褐色（10YR3/2）砂質シルトの層であり、その上面が古代の遺構検出面となつ



第4図 層序模式図



第5图 A区·撞壁1区·遭横平面图·断面图

A区 SD 2268、SK 2270～2272、SX 2273、2275

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2268 D2	1	灰色 (5Y4/1)	シルト	しまりがやや強い。粘性が強い。5cmほどのX1層のブロックを含む。
2	SD2268	1	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	砂質シルト	しまり有り。10cmほどのX1層のブロックが混じる。
3	SK2270	1	黄色 (2.5Y8/1)	砂質シルト	5～6cmの灰白色土ブロックが混じる。
4	SK2270	2	明青灰色 (10B6/7/1)	砂質シルト	グライ化した黄色土。
5	SK2271	1	淡黄色 (2.5Y8/4)	砂質シルト	鉄分を含む。灰色土がブロック状に混じる。
6	SK2271	2	灰色 (10Y4/1)	粘質シルト	一部で薄く層状に灰白色火山灰が堆積する。
7	SK2272	1	淡黄橙色 (10YR8/4)	砂質シルト	5cmほどの灰白色土ブロックが混じる。
8	SX2273	1	黒色 (2.5Y2/1)	シルト	しまり有り。砂を少量含む。白色粒を少量含む。
9	SX2273	2	黒色 (7.5Y2/1)	粘土	しまり有り。灰白色火山灰の小塊を微量に含む。
10	SX2273	3	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)	砂	しまり有り。
11	SX2273	4	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)	シルト質砂	しまり有り。斑状の灰白色火山灰と黒色土を微量に含む。
12	SX2273	5	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	ややしまりに欠ける。灰白色火山灰を斑状に少量含む。
13	SX2273	6	灰色 (5Y6/1)	火山灰	しまり有り。中心部は、ほぼ灰白色火山灰のみの堆積。端は斑状にシルト質砂を含む。
14	SX2273	7	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト質砂	しまり有り。斑状に灰白色土と黒褐色土が混じっている。
15	SX2273	8	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト質砂	しまり有り。砂分が多い。黄褐色粒を微量に含む。
16	SX2273	9	オリーブ褐色 (5Y3/1)	砂質シルト	しまり有り。シルト層に砂が斑状に多く混じる。14層と近似している。
17	SX2273	10	灰色 (5Y4/1)	シルト質砂	砂層にシルトが斑状に少量混じる。13層と近似。
18	SX2273	11	灰色 (5Y4/1)	粘土	ややしまりに欠ける。斑状に灰白色火山灰を少量含む。
19	SX2273	12	黒褐色 (10YR3/1)	シルト質砂	しまり有り。斑状に黒褐色粘質シルトを少量含む。崩落土。
20	SX2273	13	オリーブ褐色 (5Y3/1)	粘質シルト	ややしまりに欠ける。砂を斑状に少量含む。
21	SX2273	14	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト質砂	しまり有り。ブロック状に黒褐色粘質シルトを多量に含む。崩落土。

據壁1区 南壁

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2308	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまり有り。粘性が有る。白色小粒を微量に含む。斑状に酸化。
2	SD2308	2	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂	しまり有り。
3	SD2308	3	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	粘質シルト	しまり有り。しまり有り。斑状に暗灰黄色砂を含む。

ている。厚さは約15～20cmである。

XII層：地山が植物根による搅乱を受けた土であり、オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトである。厚さは約10～15cmである。

(2) 発見した遺構

A区検出遺構

SD 2267溝跡（第5図）

【位置】A区東側に位置する。

【方向・規模】北で約7度東に偏している。検出した長さは約6.0m、幅約1m、深さ約30cmである。

【埋土】埋土はすべて自然堆積層で、下層は砂や粘土、中層に灰白色火山灰小ブロックを微量に含む。上層は粘質シルトである。

【遺物】土師器小片が出土している。

SD 2268溝跡（第5・6図）

【位置】A区中央部に位置する。

【方向・規模】北で東に約45度偏している。検出した規模は長さ1m、幅30cm、深さ3cmである。

【埋土】オリーブ黒色シルトの単層で、地山ブロックを含む。

【遺物】遺物は出土していない。

SD 2269溝跡（第5図）

【位置】A区中央部からB区に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】北で約44度東に偏している。長さ9m、幅1m、深さ5cmである。

【埋土】灰色シルトの単層である。

【遺物・年代】遺物は出土していない。

S K 2270 土坑（第5・6図）

【位置】A区北西側に位置する。

【規模・平面形】平面形はほぼ円形で、規模は直径120cm、深さ50cmである。

【壁・底面】壁は底面より直角に立ち上がる。底面は平坦である。

【埋土】2層に細分できる。黄色砂質シルトで灰色シルトのブロックが混じる。下層は1層土がグライ化している。

【遺物】遺物は出土していない。

S K 2271 土坑（第5・6図）

【位置】A区北西側に位置する。

【規模・平面形】平面形はやや歪んだ円形で、規模は直径90cm、深さ30cmである。

【壁・底面】壁は底面より直角に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

【埋土】2層に細分できる。1層は、灰白色火山灰を含む2層の土をブロック状に含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S K 2272 土坑（第5・6図）

【位置】A区北西側に位置する。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径80cm、深さ40cmである。

【壁・底面】壁は底面よりやや急に立ち上がる。底面は円形に窪む。

【埋土】砂質シルトの単層で、灰色シルトのブロックが混じる。

【遺物】遺物は出土していない。

S X 2273 不明遺構（第5・6図）

【位置】A区東側に位置する。

【規模・平面形】平面形は長軸が北で約58度東に偏し、長径5.2m、短径2.2m、深さ60cmの楕円形である。北東側の一部が調査区外に延びる。

【埋土】2層に大別出来る。大別1層はほぼ均質な灰白色火山灰堆積層である6層を中心に、灰白色火山灰を少量ずつ含む堆積層である。大別2層は崩落層で、掘削後早い時期に崩落したと考えられる、ブロック状や斑状の土塊を含む。

【遺物】土師器甕（A類）、土師器小片が出土している。

【年代】灰白色火山灰降灰直前の10世紀初頭に掘削され、降灰直後に埋まったと考えられる。

S X 2274 小溝群（第5図）

【位置】A区東側に位置する。溝4条で構成される。

【方向・規模】北で約67度西に偏している。規模は、検出した範囲で、D1が長さ1.5m、幅20cm、深さ10cm、D2が長さ7m、幅30cm、深さ3cm、D3が長さ5m、幅30cm、深さ20cm、D4が4m、幅40cm、深さ10cmである。

【重複】 SX 2275 小溝群と重複し、それより新しい。

【埋土】 粘土やシルト、シルト質砂、砂などが堆積している。他層を斑状または小ブロック状に含む層が多い。D 1は灰白状火山灰を微量に含む自然堆積と考えられる。

【遺物】 遺物は出土していない。

S X 2275 小溝群（第5・6図）

【位置】 A区北東側に位置する。溝2条で構成される。

【方向・規模】 北で約29度東に偏している。規模は、検出した範囲で、D 1が長さ5m、幅30cm、深さ10cm、D 2が長さ5m、幅40cm、深さ5cmである。

【重複】 SX 2274 小溝群と重複し、それより古い。

【埋土】 オリーブ褐色のシルト質砂の単層である。

【遺物】 遺物は出土していない。

【B区検出遺構】

S D 2276 溝跡（第7図）

【位置】 B区中央部に位置する。

【重複】 SX 2285 小溝群のD 2と重複し、それより新しい。

【方向・規模】 南で27度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ5m、幅1.2m、深さ30cmである。

【埋土】 2層に細分でき、1層は灰色のシルトで、2層は地山ブロックを含む。

【遺物】 遺物は出土していない。

S D 2277 溝跡（第7図）

【位置】 B区中央部に位置する。

【重複】 他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】 北で約4度西に偏している。規模は検出した範囲で長さ3m、幅1.7m、深さ30cmである。

【埋土】 2層に細分でき、1層はオリーブ黒色シルトで、2層は灰白色の砂質シルトで、灰色のシルトブロックを含む。

【遺物】 遺物は出土していない。

S D 2278 溝跡（第7図）

【位置】 B区南側に位置する。

【重複】 SX 2286 小溝群のD 1と重複し、それより古い。

【方向・規模】 北で約42度東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ2.5m、幅40cm、深さ10cmである。

【埋土】 単層で灰色土ブロックを含む。

【遺物】 遺物は出土していない。

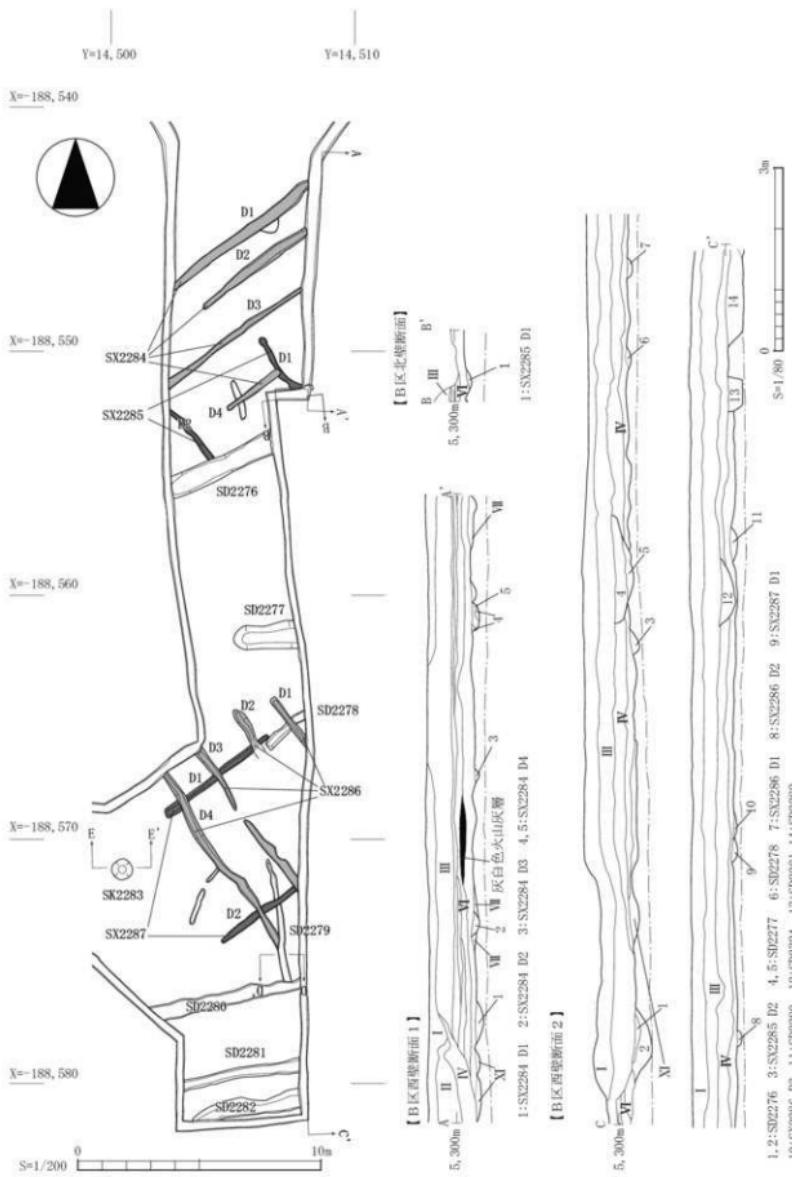
S D 2279 溝跡（第7・8図）

【位置】 B区南側に位置する。

【重複】 SX 2286 小溝群のD 4、SX 2287 小溝群のD 2、SD 2280 と重複し、SX 2286 小溝群のD 4、SX 2287 小溝群のD 2より新しく、SD 2280 よりも古い。

【方向・規模】 北で約82度西に偏している。規模は長さ5m、幅30cm、深さ10cmである。

【埋土】 灰色の粘質シルトの単層である。



第7図 B区 遺構平面図・断面図

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面は丸く窪む。

【埋土】2層に細分でき、同じ灰色シルト層であるが、下層のほうが粘性が強い。

【遺物】素焼きの大黒天の土人形が1点出土している。

S X 2284 小溝群（第7図）

【位置】B区北側に位置する。溝4条で構成される。

【方向・規模】北で約47度東に偏している。規模は検出した範囲で、D1が長さ6.5m、幅50cm、深さ10cm、D2が長さ6m、幅50cm、深さ10cm、D3が長さ7m、幅30cm、深さ10cm、D4が長さは4.5m、幅50cm、深さ10cmである。

【重複】S X 2285 小溝群と重複し、それより新しい。

【埋土】灰色やオリーブ黒色の粘質シルト、砂、シルト層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S X 2285 小溝群（第7図）

【位置】B区北東側に位置する。溝2条で構成される。

【方向・規模】北で約50度西に偏している。規模はD1が長さ3m、幅40cm、深さ5cm、D2が長さ2.5m、幅30cm、深さ5cmである。

【重複】S X 2284 小溝群、SD 2276 溝跡と重複し、それより古い。

【埋土】灰色シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S X 2286 小溝群（第7図）

【位置】B区南側に位置する。溝4条で構成される。

【方向・規模】北で約59度西に偏している。規模は検出した範囲で、D1が長さ3m、幅35cm、深さ5cm、D2が断続的に5.5m、幅40cm、深さ5cm、D3が断続的に8m、幅45cm、深さ5cm、D4が長さ10.5m、幅40cm、深さ20cmである。

【重複】S X 2287 小溝群、SD 2278 溝跡、SD 2279 溝跡と重複し、S X 2287 小溝群、SD 2278 溝跡より新しく、SD 2279 よりも新しい。

【埋土】灰色やオリーブ黒色シルトである。

【遺物】遺物は出土していない。

S X 2287 小溝群（第7図）

【位置】B区南側に位置する。溝2条で構成される。

【方向・規模】北で約37度東に偏している。規模は検出した範囲で、D1が長さ5.3m、幅40cm、深さ10cm、D2が長さ4.5m、幅40cm、深さ10cmである。

【重複】S X 2286 小溝群と重複し、それより古い。

【埋土】砂質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

【C区検出遺構】

SD 2288 溝跡（第9・10図）

【位置】C区東側に位置する。

【重複】SD 2289 溝跡と重複し、それより古い。

【方向・規模】北で約36度東に偏している。規模は、検出した範囲で、長さ10.5m、幅1.7m、深さ60cmである。

【埋土】4層に細分でき、いずれの層にも灰白色火山灰を少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2289溝跡（第9・10図）

【位置】C区中央部に位置する。

【重複】SD 2288溝跡と重複し、それより新しい

【方向・規模】北で約41度東に偏している。規模は、検出した範囲で、長さ3m、幅50cm、深さ40cmである。

【埋土】2層に細分でき、下層は灰白色火山灰をブロック状に含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2290溝跡（第9・10図）

【位置】C区中央部に位置する。

【重複】他の遺構との重複関係はない。

【方向・規模】北で約41度東に偏している。規模は、検出した範囲で、長さ9m、幅1.5m、深さ40cmである。

【埋土】暗灰色シルトの単層である。灰白色火山灰をブロック状に含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2291溝跡（第9・10図）

【位置】C区西側に位置する。

【重複】北側が現代の搅乱により壊されている。

【方向・規模】北で約82度東に偏している。規模は検出した範囲で長さ4.6m、幅20cm、深さ12cmである。

【埋土】砂質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2292溝跡（第9・10図）

【位置】C区西側に位置する。

【方向・規模】東で約81度北に偏している。規模は検出した範囲で、長さ3m、幅80cm、深さ30cmである。

【埋土】2層に細分でき、上層はシルト、下層は黒色土ブロックを含む砂である。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2293溝跡（第9・10図）

【位置】C区中央部に位置する。X 1層直下の地山層上面で確認した。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】東で約2度南に偏し、やや湾曲している。規模は検出した範囲で、長さ5.4m、幅60cm、深さ20cmである。

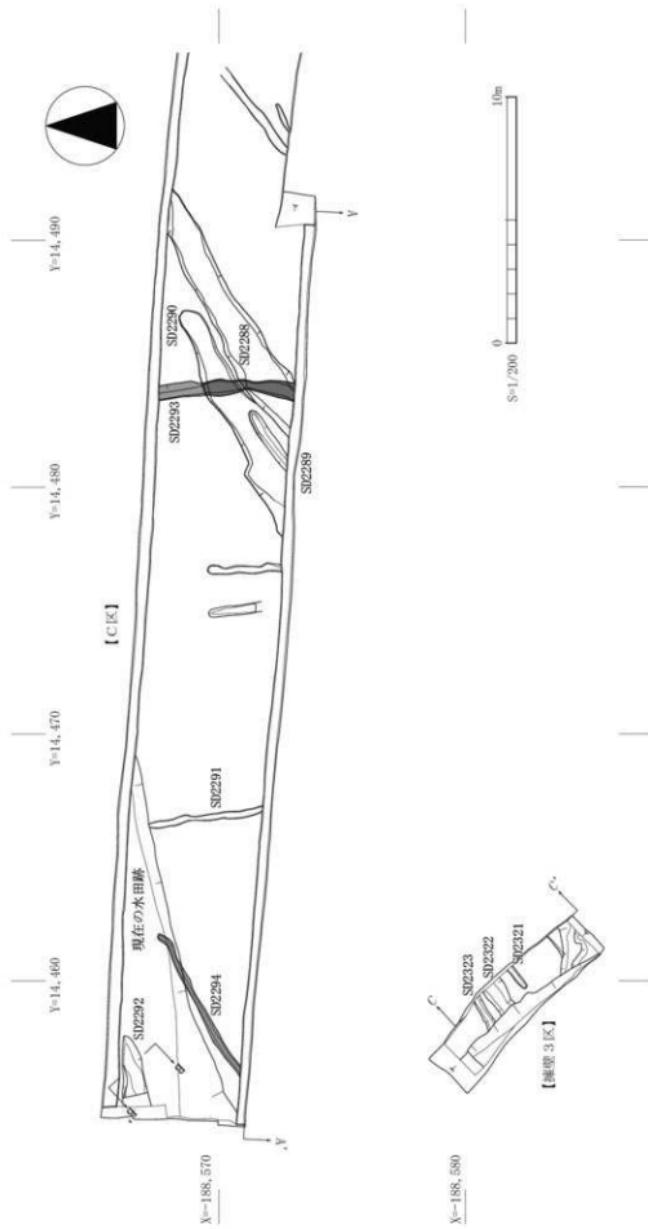
【埋土】単層であり、X 1層で埋められている。

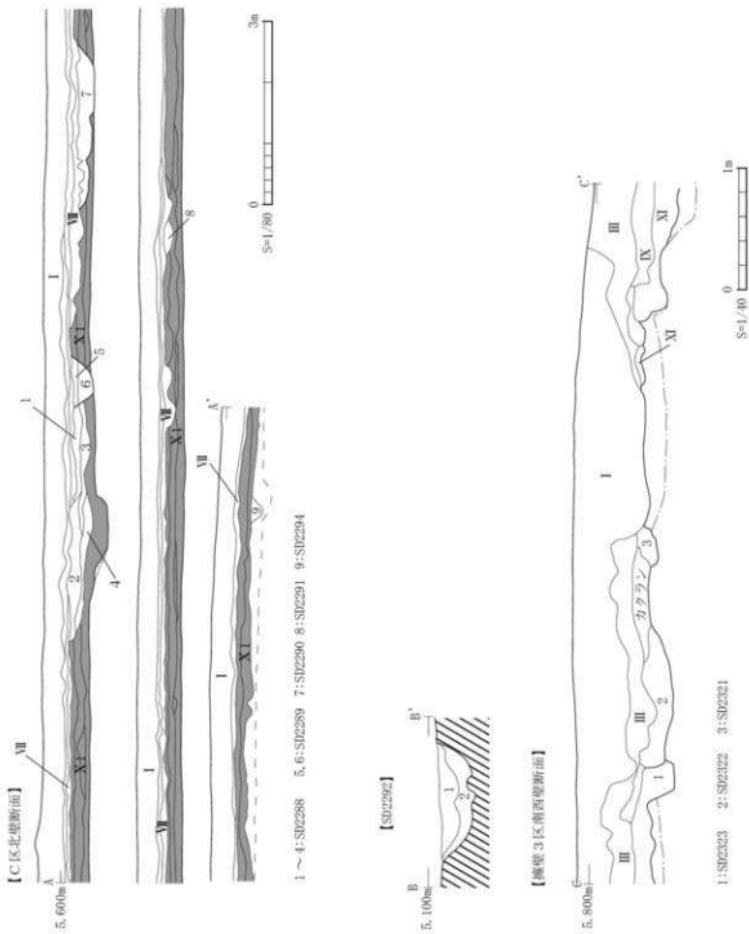
【遺物】遺物は出土していない。

【年代】古代の遺構検出面と考えられるX 1層直下の地山層上面で確認したことから、それ以前の年代の遺構と考えられる。しかし、埋土から遺物が出土しなかったことから、詳細な年代は不明である。

第9図 C区・城壁3区 遺構平面図

地山上面で検出した遺構





第10図 C区・擁壁3区 連構断面図

C区 北壁

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2288	1	灰色 (10Y6/1)	シルト	しまりがやや強い。粘性がやや弱い。灰白色小粒を含む。4cmほどの褐色シルトブロックを含む。根による擾乱層とみられる。
2	SD2288	2	灰白色 (10Y7/1)	砂質シルト	しまりがやや強い。粘性は中程度。全体的に鉄分を含む。5cmほどの5層土ブロックを含む。
3	SD2288	3	灰色 (5Y6/1)	シルト	しまりがやや強い。粘性が強い。灰白色粒やブロックを全体的に含む。部分的に鉄分を含む。
4	SD2288	4	灰色 (N5/0)	砂質シルト	しまりがやや弱い。粘性がやや強い。鉄分を全体的に含む。灰白色ブロックを含む。
5	SD2289	5	灰白色 (10Y7/1)	砂質シルト	しまりがやや弱い。粘性が弱い。鉄分を全体に含む。
6	SD2289	6	灰色 (7.5Y6/1)	シルト	しまりは中程度。粘性がやや強い。灰白色土を筋状またはブロック状に含む。鉄分を多く含む部分もある。
7	SD2291	8	灰色 (N6/0)	砂質シルト	しまりが弱い。粘性がやや弱い。鉄分を含む。灰白色土ブロックを少量含む。
8	SD2294	9	灰色 (N5/0)	砂質シルト	しまりがやや弱い。粘性が強い。1~2cmほどのX1層のブロックを含む。

C区 SD 2292

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2292	1	灰色 (N5/0)	シルト	しまりが強い。粘性がやや強い。鉄分を多く含む。
2	SD2292	2	淡黄色 (2.5Y8/4)	砂	しまりが弱い。粘性がやや弱い。5~10cmほどの黒色土ブロックを含む。

3区 北東壁

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2321	1	黒褐色 (2.5Y3/2)	砂質シルト	非常にしまっている。腐食した草類植物根痕を含む。白色小粒を含む。
2	SD2322	2	黒褐色 (2.5Y3/2)	砂質シルト	非常にしまっている。X1層をブロック状に含む。斑状に灰白色火山灰を少量含む。
3	SD2323	3	灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	非常にしまっている。X1層をブロック状に含む。

SD 2294 溝跡（第9・10図）

【位置】C区西側に位置する。X1層直下のX2層上面で確認した。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】北で約30度東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ6.5m、幅40cm、深さ20cmである。

【埋土】灰色粘質シルトの単層で、地山ブロックを含む。

【遺物】出土していない。

【年代】古代の遺構検出面と考えられるX1層直下のX2層上面で確認したことから、それ以前の年代の遺構と考えられる。しかし、埋土から遺物が出土しなかったことから、詳細な年代は不明である。

その他、調査区C区西端にて、土師器壺、土師器甕（A類）、土師器甕（B類）がX1層上面より集中して出土している（第11図）。VII層とX1層の土層の境で出土している。

【D区検出遺構】

SD 2295 溝跡（第12・13図）

【位置】D区南側に位置する。

【重複】SD 2296 溝跡と重複し、それより古い。

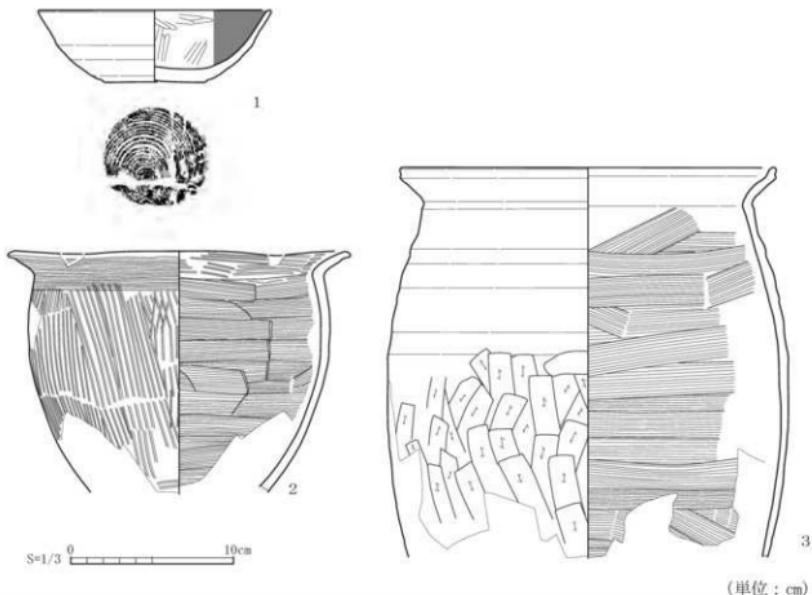
【方向・規模】北で約19度東に偏している。規模は長さ2.5m、幅40cm、深さ10cmである。

【埋土】2層に細分でき、上層は黒褐色の粘質シルトで、下層はX1層（地山）土に黒褐色土が斑状に混じっている。

【遺物】遺物は出土していない。

SD 2296 溝跡（第12・13図）

【位置】D区南側に位置する。



(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	土師器 壺	-	X I 層	ロクロナダ 底部: 回転系切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.2) 7/24	6.2 24/24	4.4	R1	B V類
2	土師器 甕	-	X I 層	口縁部: ヨコナダ 体部: ハケメ	口縁部: ハケメ 体部: ヘラナダ	(20.8) 7.5/24	-	-	R2	A類
3	土師器 甕	-	X I 層	ロクロナダ→ヘラケズリ	ロクロナダ→ヘラナダ	(22.9) 4/24	-	(24.0)	R3	B類

第11図 C区出土遺物

【重複】 SD 2295 溝跡と重複し、それより新しい。

【方向・規模】 北で約50度西に偏している。規模は長さ8m、幅30cm、深さ15cmである。

【埋土】 2層に細分でき、上層は黒褐色粘質シルトで、下層は地山土に黒褐色土が斑状に混じっている。

【遺物】 遺物は出土していない。

SD 2297 溝跡（第12・13図）

【位置】 D区南側に位置する。

【重複】 他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】 北で約59度西に偏している。規模は長さ8m、幅40cm、深さ10cmである。

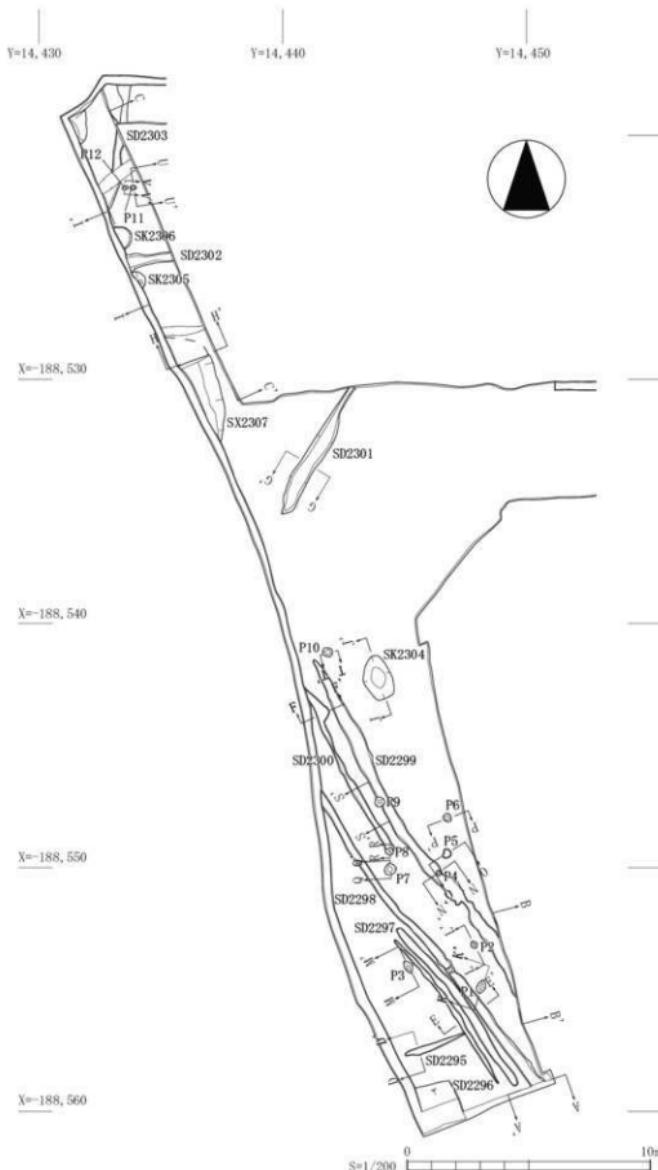
【埋土】 2層に細分でき、上層は黒褐色粘質シルトで、下層は地山土に黒褐色土が斑状に混じっている。

【遺物】 遺物は出土していない。

SD 2298 溝跡（第12・13図）

【位置】 D区南側に位置する。

【重複】 他の遺構と重複関係はない。



第 12 図 D 区 遺構平面図

D区 SD 2295 ~ 2303 SK 2304 ~ 2306 SX 2307 P 1 ~ P 12

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2295	1	黒褐色 10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。
2	SD2295	2	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	黄褐色地山シルトに黒褐色土を斑状に少量含む。
3	SD2296 ~ 2297	1	黒褐色 10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。
4	SD2296 ~ 2297	2	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	黄褐色地山シルトに黒褐色土を斑状に少量含む。
5	SD2298	1	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	粘質シルト	しまり有り。暗灰黄色砂をロック状に少暈含む。
6	SD2298	2	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂	しまり有り。暗灰黄色粘質シルトをロック状に少量含む。
7	SD2299	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山をロックを少暈含む。
8	SD2299	2	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山プロックを大量に含む。
10	SD2300	1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト質砂	しまり有り。黄褐色地山に黒褐色砂質シルトを斑状に含む。
11	SD2301	1	黒褐色 (2.5Y3/2)	粘質シルト	しまり有り。グラウ化した黄褐色地山砂を斑状に含む。
12	SD2301	2	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまり有り。斑状に黒褐色土を少暈含む。
13	SX2307	1	灰色 (7.5Y5/1)	砂	上部ほど粒子が粗くなり、炭化度が高い。水流による自然堆積層。
14	SX2307	2	オーリーブ黒色 (5Y3/1)	粘質砂	ほぼ均質。水流による堆積層。
15	SD2302	3	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	ややしまり有り。粘性が強い。自然堆積。
16	SD2302	4	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	ややしまって。粘性が強い。
17	SD2303	1	褐灰色 (7.5YR4/1)	粘質シルト	しまって。炭化粒を微量に含む。
18	SD2303	2	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂質シルト	しまって。ほぼ均質。
19	SK2304	1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂質シルトを斑状に含む。
20	SK2304	2	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂質シルトを斑状に多く含む。
21	SK2304	3	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂質シルトを斑状に微量に含む。
22	SK2305	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。粘性が強い。
23	SK2305	2	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	しまり有り。地山に黒褐色土を斑状に少暈含む。
24	P1	1	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂を斑状に多く含む。
25	P1	2	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂をロック状に多く含む。
26	P1	3	黄褐色 (2.5Y5/4)	砂	しまり有り。地山中に暗褐色シルトを斑状に少暈含む。
27	P2	1	黒褐色 (7.5YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。粘性が強い。
28	P3	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。粘性が強い。黄褐色地山砂を斑状に少暈含む。
29	P4	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂を斑状に含む。
30	P5	1	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。
31	P5	2	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	砂	黄褐色地山砂に、斑状の黒褐色土を少暈含む。
32	P6	1	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。亀裂に灰白色火山灰が含侵している。
33	P7	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色土を斑状に少暈含む。
34	P7	2	黄褐色 (2.5Y5/3)	シルト	しまり有り。地山の大きなロックを含む。
35	P7	3	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黒褐色土を斑状に微量に含む。
36	P7	4	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂質シルト	しまり有り。黄褐色地山砂質シルトに3層土を斑状に少暈含む。
37	P8	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。亀裂に灰白色火山灰が含侵している。
38	P9	1	黄灰色 (2.5Y4/1)	粘質シルト	しまり有り。斑状の黄褐色地山砂質シルトを微量に含む。亀裂に灰白色火山灰が含侵している。
39	P10	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。斑状の黄褐色地山砂質シルトを少暈含む。亀裂に灰白色火山灰が含侵している。
40	P10	2	黄褐色 (2.5Y5/3)	砂	しまり有り。黄褐色地山砂に1層土を斑状に微量含む。
41	P11	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。粘性が強い。
42	P12	1	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均質。粘性が強い。

E区 P 13

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	P13	1	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘質シルト	しまり有り。ほぼ均一。亀裂に灰白色火山灰が入り込んでいる。

【方向・規模】北で約 59 度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ 15 m、幅 50 cm、深さ 20 cm である。

【埋土】2 層に細分でき、上層は暗灰黄色粘質シルトで、下層は地山土に暗灰黄色土が斑状に混じっている。

【遺物】遺物は出土していない。

SD 2299 溝跡 (第 12・13 図)

【位置】D 区南側に位置する。

【重複】P 4、P 9 と重複し、それより古い。

【方向・規模】北で約 52 度西に偏し、蛇行する。規模は検出した範囲で、長さ 16 m、幅 60cm、深さ 40cm である。

【埋土】2 層に細分でき、いずれも黒褐色粘質シルトで黄褐色地山ブロックを含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2300 溝跡（第 12・13 図）

【位置】D 区南側に位置する。

【重複】P 8 ピットと重複し、それより古い。

【方向・規模】北で約 62 度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ 7 m、幅 60cm、深さ 10cm である。

【埋土】単層で、黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質シルトを多量に含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2301 溝跡（第 12・13 図）

【位置】D 区中央部に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】北で約 63 度東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ 6 m、幅 70cm、深さ 20cm である。

【埋土】2 層に細分でき、いずれも黄褐色地山土を斑状に含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2302 溝跡（第 12・13 図）

【位置】D 区北側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】北で約度 72 東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ 2 m、幅 60cm、深さ 40cm である。

【埋土】粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2303 溝跡（第 12・13 図）

【位置】D 区北側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】北で約 84 度東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ 3 m、幅 30cm、深さ 10cm である。

【埋土】炭化物を微量に含む灰褐色シルトなどである。

【遺物】遺物は出土していない。

S K 2304 土坑（第 12・13 図）

【位置】D 区中央部に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】規模は長径 1.8 m、短径 1.2 m の楕円形で、深さ 50cm である。

【壁・底面】壁は南側が急角度で、北側は緩やかに立ち上がって中頃に段がつく。底面はほぼ平坦である。

【埋土】3 層に細分できる。いずれも黄褐色地山土を斑状に含む層で、人為的に埋め戻されたと考えられる。

【遺物】遺物は出土していない。

S K 2305 土坑（第 12・13 図）

【位置】D区北側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】検出した部分については、概ね円形を呈しており、規模は直径70cm、深さ40cmである。

【壁・底面】漏斗状を呈しており、北側の壁がやや緩やかに立ち上がる。

【埋土】2層に細分できる。上層は黒褐色粘質シルトである。下層は、黒褐色土と黄褐色地山ブロックを斑状に含む層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S K 2306 土坑（第12・13図）

【位置】D区北側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】検出した部分については、概ね円形を呈しており、規模は直径1m、深さ33cmである。

【壁・底面】壁は段差を付けて立ち上がり、底面は丸く窪む。

【埋土】粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S X 2307 河川跡（第12・13図）

【位置】D区北側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】検出した部分については、規模は検出した範囲で、長さ4m、幅1.3m、深さ80cmである。

【埋土】2層に細分できる。

【遺物】遺物は出土していない。

P 1（第12・13図）

【位置】D区南側に位置する。

【規模・平面形】平面形は橢円形で、規模は長径60cm、短径40cm、深さ10cmである。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面は凹凸がある。

【埋土】3層に細分でき、いずれの層にも地山砂がブロック状または斑状に混じっている。

【遺物】遺物は出土していない。

P 2（第12・13図）

【位置】D区南側に位置する。

【規模・平面形】平面形は橢円形で、規模は長径30cm、短径20cm、深さ25cmである。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面は丸く窪む。

【埋土】均質な粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

P 3（第12・13図）

【位置】D区南側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】平面形は橢円形で、規模は長径60cm、短径30cm、深さ5cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。

【埋土】地山を斑状に含む粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

P 4 (第 12・13 図)

【位置】D 区南側に位置する。

【重複】SD 2299 溝跡と重複し、それより新しい。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 20cm、深さ 5cm である。

【壁・底面】壁はやや急角度で立ち上がり、底面には凸凹がある。

【埋土】地山を斑状に含む粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

P 5 (第 12・13 図)

【位置】D 区南側に位置する。

【規模・平面形】平面形は歪な円形で、規模は直径 40cm、深さ 20cm である。

【壁・底面】壁はほぼ直角に立ち上がり、底面は東側が落ち込む。

【埋土】2 層に細分でき、上層は均質な粘質シルトで、下層は黄褐色地山と黒褐色土が斑状に混じっている。

【遺物】遺物は出土していない。

P 6 (第 12・13 図)

【位置】D 区南側に位置する。

【方向・規模】平面形は円形で、規模は直径 40cm、深さ 10cm である。

【壁・底面】壁はやや急に立ち上がり、底面は丸く壅む。

【埋土】粘質シルトの単層で黄褐色地山土を斑状に含む。ひび割れに灰白色火山灰が入り込んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

P 7 (第 12・13 図)

【位置】D 区南側に位置する。

【規模・平面形】平面形はほぼ円形で、規模は直径 50cm、深さ 15cm である。

【壁・底面】壁はやや急角度で立ち上がり、底面はやや丸みを帯びている。

【埋土】4 層に細分でき、いずれも他層土を斑状またはブロック状に混入する粘性が強いシルトである。

同時期に埋め戻されたと考えられる。

【遺物】遺物は出土していない。

P 8 (第 12・13 図)

【位置】D 区南側に位置する。

【重複】SD 2300 溝跡と重複し、それより新しい。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 40cm、深さ 20cm である。

【壁・底面】壁は南側が直角に立ち上がり、北側が凹凸しながら立ち上がる。底面は丸く壅む。

【埋土】均質な粘質シルトの単層で、ひび割れに灰白色火山灰が入り込んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

P 9 (第 12・13 図)

【位置】D区南側に位置する。

【重複】SD 2299 溝跡 (SD50) と重複し、それより新しい。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 40cm、深さ 30cm である。

【壁・底面】壁は南側が内湾しながら立ち上がり、北側がやや急に立ち上がる。底面は丸く窪む。

【埋土】粘質シルトの単層で黄褐色砂質シルトの地山を斑状に含む。ひび割れに灰白色火山灰が入り込んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

P 10 (第 12・13 図)

【位置】D区南側に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 40cm、深さ 15cm である。

【壁・底面】底が丸く窪んである。

【埋土】2 層に細分でき、黄褐色砂質シルトの地山を斑状に含む。ひび割れに灰白色火山灰が入り込んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

P 11 (第 12・13 図)

【位置】D区中央部に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 40cm、深さ 10cm である。

【壁・底面】壁は直角に立ち上がり、底は丸く窪む。

【埋土】粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

P 12 (第 12・13 図)

【位置】D区中央部に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 20cm、深さ 30cm である。

【壁・底面】底が丸く窪んでいる。

【埋土】粘質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

【E区検出遺構】

P 13 (第 13 図)

【位置】E区中央部に位置する。

【規模・平面形】平面形は円形で、規模は直径 30cm、深さ 15cm である。

【壁・底面】東側はほぼ直角に立ち上がり、西側はほぼ直角に立ち上がった後に段差があり、そこからは緩やかに立ち上がる。底面は丸く窪んでいる。

【埋土】粘質シルトの単層で、ひび割れに灰白色火山灰が入り込んでいる。

【遺物】遺物は出土していない。

【擁壁1区検出遺構】

S D 2308 溝跡（第5図）

【位置】擁壁1区に位置する。

【方向・規模】北で約1度東に偏している。検出した範囲で、長さ14m、幅40cm、深さ40cmである。擁壁2東壁付近での延長が確認できる。

【埋土】3層に細分でき、堆積状況から下部2層は崩落土。1層土は自然堆積土と考えられる。

【遺物】遺物は出土していない。

【擁壁2区出土遺構】

S X 2309 小溝群

S D 2309 溝跡（第14図）

【位置】擁壁2区の東側に位置する。

【方向・規模】北で約73度東に偏している。検出した範囲で、規模は長さ1.4m、幅40cm、深さ40cmである。

【埋土】2層に細分でき、地山を斑状に含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2310 溝跡（第14図）

【位置】擁壁2区の東側に位置する。

【方向・規模】北で約81度東に偏している。規模は検出した範囲で長さは断続的に1.5m、幅15cm、深さ5cmである。

【埋土】砂質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2311 溝跡（第14図）

【位置】擁壁2区の中央部に位置する。

【方向・規模】北で約80度東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ1.7m、幅200cm、深さ50cmである。

【埋土】2層に大別でき、1層は人為的埋め戻し層で、2層は地山崩落土と自然堆積層である。

【遺物】遺物は出土していない。

S X 2312 小溝群

S D 2312 溝跡（第14図）

【位置】擁壁2区の中央部に位置する。

【方向・規模】北で約76度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ1.5m、幅40cm、深さ30cmである。

【埋土】灰黄褐色粘質シルトで、上層はしまりがあり、下層はしまりがない。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2313 溝跡（第14図）

【位置】擁壁2区の中央部に位置する。

【重複】他の遺構と重複関係はない。

【方向・規模】北で約78度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ1.5m、幅40cm、深さ30cmである。

【埋土】砂質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

SD 2314 溝跡（第14図）

- 【位置】擁壁2区の中央部に位置する。
- 【方向・規模】北で約71度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ1.5m、幅40cm、深さ20cmである。
- 【埋土】2層に細分でき、ブロック状に黄褐色地山土を含む。
- 【遺物】遺物は出土していない。

SD 2315 溝跡（第14図）

- 【位置】擁壁2区の西側に位置する。
- 【重複】他の遺構と重複関係はない。
- 【方向・規模】北で約64度西に偏している。規模は検出した範囲で、長さ1.6m、幅30cm、深さ5cmである。
- 【埋土】砂質シルトの単層である。
- 【遺物】遺物は出土していない。

SD 2316 溝跡（第14図）

- 【位置】擁壁2区の西側に位置する。
- 【方向・規模】北で約80度東に偏している。平面形は不定形である。確認できる規模は長さ1.5m、幅50cm、深さ20cmである。
- 【埋土】粘質シルトの単層である。
- 【遺物】遺物は出土していない。

SD 2317 溝跡（第14図）

- 【位置】擁壁2区の西側に位置する。
- 【重複】SD 2318 溝跡と重複し、それより新しい。
- 【方向・規模】北で約58度西に偏している。確認できる規模は長さ1.7m、幅30cm、深さ10cmである。
- 【埋土】粘質シルトの単層である。
- 【遺物】遺物は出土していない。

SD 2318 溝跡（第14図）

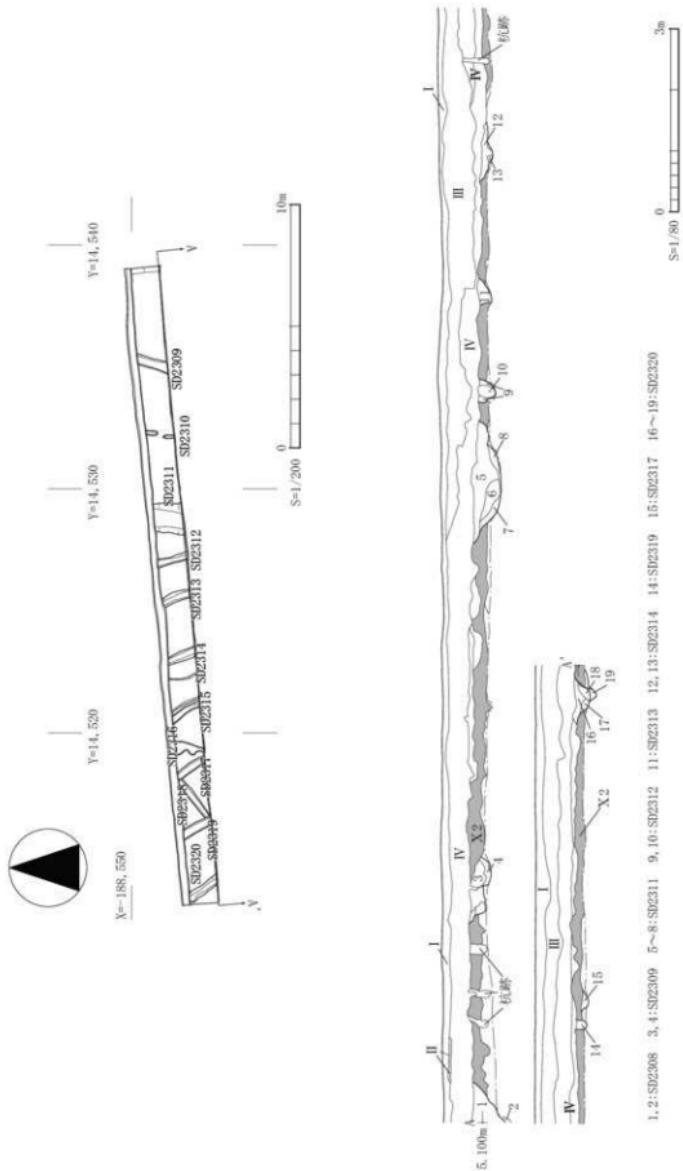
- 【位置】擁壁2区の西側に位置する。
- 【重複】SD 2317、SD 2319 溝跡と重複し、それより古い。
- 【方向・規模】北で約35度東に偏している。確認できる規模は長さ1.8m、幅30cm、深さ5cmである。
- 【埋土】砂質シルトの単層である。
- 【遺物】遺物は出土していない。

SD 2319 溝跡（第14図）

- 【位置】擁壁2区の西側に位置する。
- 【重複】SD 2318 溝跡と重複し、それより新しい。
- 【方向・規模】北で約66度西に偏している。確認できる規模は長さ1.5m、幅40cm、深さ5cmである。
- 【埋土】砂質シルトの単層である。
- 【遺物】遺物は出土していない。

SD 2320 溝跡（第14図）

- 【位置】擁壁2区の西側に位置する。



第14圖 擠壁2區 遺構平面圖・南壁断面図

擁壁2区 南壁

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2309	3	黒褐色 (10YR3/1)	砂質シルト	しまり有り。黄褐色地山ブロックを少量含む。人為的堆積。
2	SD2309	4	暗灰黄色 (2, 5Y4/2)	砂質シルト	しまり有り。黄褐色地山を斑状に多く含む。人為的堆積。
3	SD2311	5	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまり有り。砂分を微量に含む。黄褐色地山ブロックを微量に含む。人為的堆積。大別1層。
4	SD2311	6	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	しまり有り。砂分を少量含む。黄褐色地山ブロックを少量含む。人為的堆積。大別1層。
5	SD2311	7	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。砂分を少量含む。自然堆積。大別2層
6	SD2311	8	にぶい黄色 (2, 5Y6/3)	シルト質砂	しまり有り。黒褐色土を斑状に少々含む。地山崩落土。大別2層。
7	SD2312	9	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山小ブロックを少量含む。砂分を少量含む。
8	SD2312	10	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘質シルト	しまりに欠ける。粘性が強い。
9	SD2313	11	褐灰色 (10YR4/1)	砂質シルト	しまり有り。粘性やや有り。黄褐色地山を斑状に少量含む。
10	SD2314	12	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまり有り。砂分を少々含む。黄褐色地山ブロックを少量含む。
11	SD2314	13	オリーブ褐色 (2, 5Y4/3)	砂	しまり有り。褐灰色土を斑状に含む。人為的堆積。
12	SD2319	14	黒褐色 (10YR3/2)	砂質シルト	しまり有り。斑状に黒褐色土を少々含む。土師器細片を微量に含む。
13	SD2317	15	黄灰色 (2, 5Y4/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山を斑状に多く含む。
14	SD2320	16	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	しまり有り。大別1層。
15	SD2320	17	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	しまり有り。大別1層
16	SD2320	18	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	しまり有り。黄褐色地山を斑状に少量含む。人為的堆積。大別2層。
17	SD2320	19	黄褐色 (2, 5Y5/3)	シルト質砂	しまり有り。黒褐色土を斑状に多く含む。人為的堆積。大別2層。

【方向・規模】北で約60度西に偏している。確認できる規模は長さ1.7m、幅50cm、深さ40cmである。

【埋土】2層に大別できる。1層は暗褐色などの自然堆積層で、2層は黄褐色地山土や黒褐色土のブロックが多い人為的な埋め戻し層である。

【遺物】遺物は出土していない。

擁壁3区検出遺構

S D 2321 溝跡（第9・10図）

【位置】擁壁3区に位置する。

【方向・規模】北で約41度東に偏している。規模は検出した範囲で長さ1m、幅30cm、深さ20cmである。

【埋土】砂質シルトの単層である。

【遺物・年代】遺物は出土していない。

S D 2322 溝跡（第9・10図）

【位置】擁壁3区に位置する。

【重複】S D 2323 溝跡と重複し、それより新しい。近世の水路に切られている。

【方向・規模】北で約35度東に偏している。規模は検出した範囲で、長さ1.2m、幅1.2m、深さ25cmである。

【埋土】砂質シルトの単層である。灰白色火山灰を少量含む。

【遺物】遺物は出土していない。

S D 2323 溝跡（第9・10図）

【位置】擁壁3区に位置する。

【重複】擁壁3区北東壁でS D 2322 溝跡と重複し、それより古い。

【方向・規模】北で約26度東に偏している。規模は検出した範囲で長さ1.4m、幅30cm、深さ20cmである。

【埋土】地山ブロックを含む砂質シルトの単層である。

【遺物】遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査では溝跡30条、小溝群6群、土坑4基、ピット3基、不明遺構1基、河川跡1条を確認した。いずれの遺構も出土遺物が少なく、またすべて破片であるため詳細な年代は導き出せない。しかし、遺構埋土や遺構検出面を覆う自然堆積層に灰白色火山灰が含まれる。土層断面の観察から灰白色火山灰の堆積パターンが4つあることが確認でき、(1)層状に純粹な灰白色火山灰層として堆積、(2)数cmのブロック状に堆積、(3)堆積土が斑状の灰白色火山灰を含む、(4)ひび割れに灰白色火山灰が含侵している、である。

これらのうち、(1)に関しては堆積状況から灰白色火山灰が降下した原位置を留めているか、直後に雨水などの作用で流入してきたと考えられる。A区で確認したSX2273不明遺構の6層はほぼ純粹な灰白色火山灰の層となっており、遺構の年代の下限は灰白色火山灰降下以前の10世紀前葉以前と考えられる。また、(4)に関しては、灰白色火山灰降下以前に埋没していることがわかる。

C区の遺構検出面であるX1層上面からは土師器壺B・V類、土師器甕A類、B類が出土している。第11図3は外側調整にハケメが主に用いられる点、口縁部に平坦面を形成している点などから、9世紀前半から10世紀中頃にかけて東北地方南部で見られる非クロコ土師器と考えられる(福島県教育委員会1998年)。共伴するロクロ成形の土器の年代とも矛盾せず、これらのことからX1層の年代の上限が9世紀前半であることがわかる。

また、C区のX1層直下の地山層上面から溝跡を2条(SD2293、SD2294)検出している。古代以前の遺構であることはわかるが、遺物が出土していないため、詳細な年代は不明である。

耕作の跡と考えられる小溝群を調査区東側で検出しており、生産域として土地利用されていた可能性が高い。小溝群であるSX2274とSX2275、SX2284とSX2285、SX2286とSX2287はそれぞれ重複関係にあり、規模や方向が異なることから、ある一定の時間幅の中で耕作が行われていたことが想定できる。本調査区の東側隣接地で行われた新田遺跡第76次調査(多賀城市教育委員会2012)においても重複する小溝群を確認しており、その年代を古代から中世と位置付けている。したがって、この一帯が連続して生産域とされていたことがわかる。

なお、今回の調査の試掘・確認調査において、灰白色火山灰降下前の古代の水田跡の存在が報告されていたが、本調査では水田跡は確認できなかった。

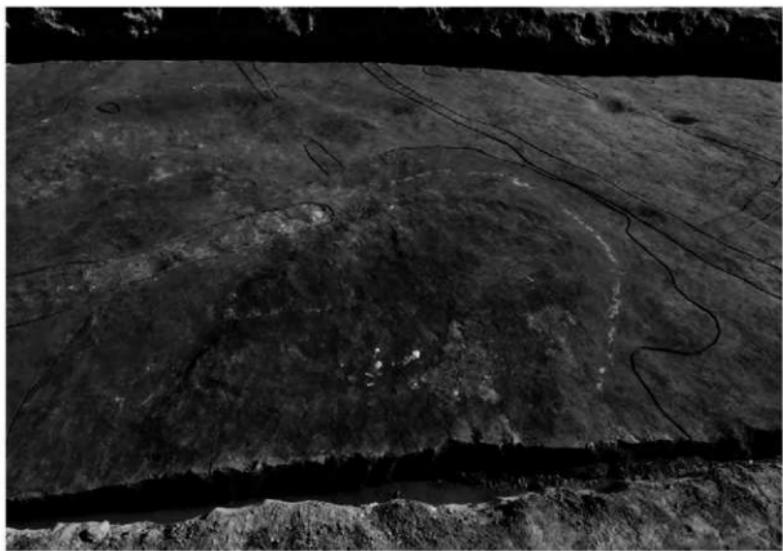
参考文献

- 多賀城市教育委員会「新田遺跡第76次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成23年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財報告書108集 2012
多賀城市教育委員会「新田遺跡第136次調査」『多賀城市内の遺跡2－平成31年度はか発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第144集 2020
福島県教育委員会「小又遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告書2』福島県文化財調査報告書第333集 1998

写真図版 1



1 A区 全景（南東から）



2 A区 S X 2273 不明遺構検出（北から）

写真図版 2



1 A区 SX 2274、2275 小溝群 完掘（北から）



2 B区 全景（南から）

写真図版 3



1 B区 SX 2284、2285 小溝群 完掘（南東から）



2 B区 SX 2286、2287 小溝群 完掘（南東から）

写真図版 4



1 C区 全景（東から）



2 C区 SD 2293 溝跡 完掘（南から）

写真図版 5



1 C区 SD 2294 溝跡 完掘（南から）



2 C区 X 1層上面遺物検出状況（北から）

写真図版 6



1 D区南側 全景（南から）



2 D区北側 全景（南から）

写真図版 7



1 E区 全景（西から）



2 擁壁1区 全景（北から）

写真図版 8



1 捩壁2区 全景（東から）



2 捩壁3区 全景（北から）

写真図版 9



1 C区 X 1層上面出土
土師器壺 (R 1)



2 C区 X 1層上面出土
土師器壺 (R 2)



3 C区 X 1層上面出土
土師器壺 (R 3)

III 新田遺跡第143次調査・山王遺跡第222次調査

1. 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字松島原1-1-2、山王字三千刈1-4および山王字三千刈1-1-1における宅地造成工事に伴う本発掘調査である。令和元年6月12日に、事業者より当該地での宅地造成計画と埋蔵文化財のかかわりについて協議書が提出された。計画では現地表に最大85cmの盛土を施し、道路部分では側溝設置で幅80cm、深さ73cm、給排水管敷設で幅最大約2.2m、深さ最大約2.2mの掘削を行うというものであった。

当該地周辺では、北側隣接地において平成18年度に新田遺跡第35次調査を、東側隣接地において平成21年度に山王遺跡第75次調査を実施しており、第35次調査では深さ約90cm、第75次調査では深さ1.3mで遺構を確認していることから、本計画による埋蔵文化財への影響が懸念された。

令和元年10月8日に事業者より調査に関する依頼書及び承諾書の提出を受け、本発掘調査に要する期間や予算を算定するための確認調査である新田遺跡第138次調査・山王遺跡第216次調査を令和元年10月15日から11月1日にかけ実施した。遺構の分布は希薄であったが、古代の遺構面と見られる砂層の下層に、水田層の可能性のある土層の堆積が見られたことから、古墳時代と古代の遺構の存在を想定した。

調査計画について協議を行ったところ、事業者との合意に至ったことから、令和2年6月12日より本発掘調査に着手した。

表土掘削は新田遺跡第143次調査の調査区西側から行い、それを19日に終了した後に山王遺跡第222次調査へ移行し、6月30日に終了した。引き続き、各調査区の遺構検出を開始し、新田遺跡第143次調査区では遺構、遺物を発見できなかったため7月11日に調査区の埋戻しを行い、調査を終了した。山王遺跡第222次調査区では8月4日から遺構検出作業、写真撮影、図面作成を開始した。

あわせて確認調査の時点で指摘されていた下層での遺構の有無を確認するため、調査区北辺に沿って三か所で深掘りを行った。黒色粘土層を確認したものの、畦畔などの遺構は確認できなかった。8月18日に現場の撤収作業を行い、22日に埋め戻しを行い山王遺跡第222次調査の一切を終了した。

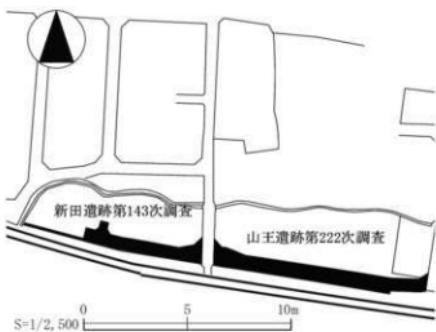
2. 調査成果

(1) 層序(第3図)

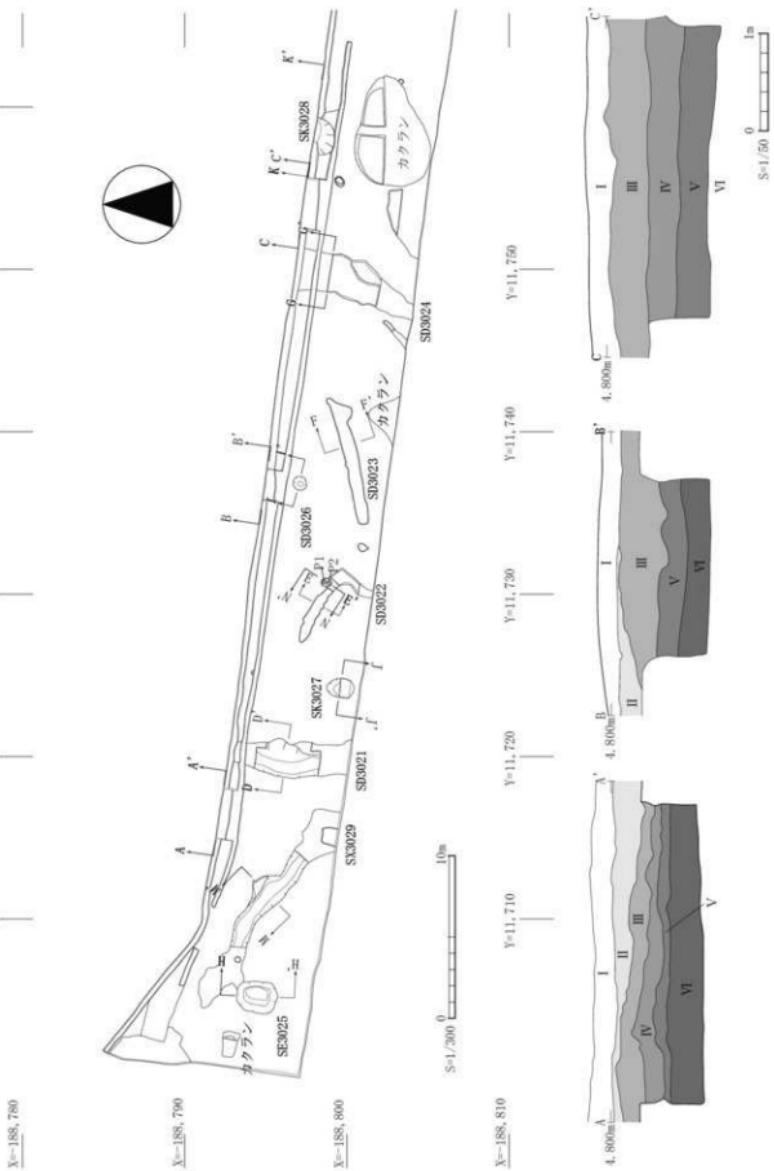
I層：黒褐色(10YR3/1)粘土で厚さは20～40cmである。現代の水田耕作土。



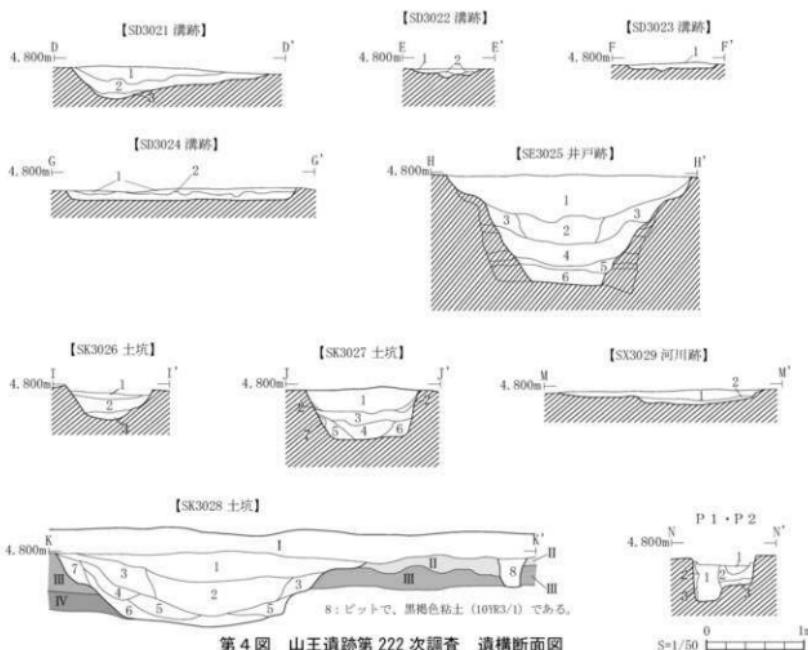
第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 山王遺跡第222次調査 調査区平面図・断面図



第4図 山王遺跡第222次調査 遺構断面図

II層：オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂で厚さは8cm～40cmである。上面が古代の遺構検出面。

III層：黄褐色（2.5Y5/3）粗砂で厚さは10～60cmである。

IV層：暗灰黄色（2.5Y4/2）砂で厚さは10～30cmである。

V層：灰色（10Y4/1）砂で厚さは6～46cmである。

VII層：黄灰色（2.5Y4/1）粘土と黒色（N5/0）粘土の互層で厚さは20～40cmである。

(2) 発見した遺構

山王遺跡第222次調査

SD3021溝跡（第3・4図）

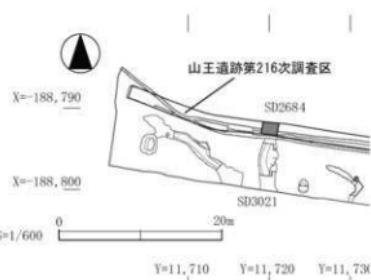
【位置・形態】調査区西側で確認した。山王遺跡第216次調査のSD2684溝跡に対応する（第5図）。

【規模・方向】方向は、ほぼ真北を示している。検出した長さは7m、上幅0.7m～1.2m、深さは30cmである。

【形・底面】西側は急角度で立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

【埋土】3層に細分できる。1層は黒褐色（10YR3/2）

シルト、2層にはぶい黄褐色（10YR4/3）シルトで黒褐色（10YR3/1）粘土ブロックが混じる。3層は灰黄褐色（10YR5/2）細砂である。



第5図 山王216調査区・山王222調査区合成図

【遺物】出土していない。

S D 3022 溝跡（第3・4図）

【位置・形態】調査区中央で確認した。カギ形に屈曲する溝である。

【重複】P 1と重複しており、それより古い。

【規模・方向】方向は、南東部分が東で約60度南に、南北部分が北で約58度東に偏っている。検出した長さは6m、上幅は0.4m～1m、深さは10cmである。

【形・底面】壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

【埋土】2層に細分できる。1層は黒色（10YR2/1）シルトで、2層は褐色（10YR4/1）シルトで灰黄褐色（10YR2/1）細砂ブロックが混じる。

【遺物】土器師小片が出土した。

S D 3023 溝跡（第3・4図）

【位置・形態】調査区中央で確認した。

【規模・方向】方向は、北で東に約15度偏っている。検出した長さは8m、上幅は40cm～60cm、深さは6cmである。

【形・底面】壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】黒色（10YR2/1）粘土が混じるにぶい黄褐色（10YR4/3）細砂の単層である。

【遺物】出土していない。

S D 3024 溝跡（第3・4図）

【位置・形態】調査区東側で確認した。

【規模・方向】方向は北半部が東に約80度、南半部が西に62度偏っている。検出した長さは7.6m、上幅は2.4m～1m、深さは10cmである。

【形・底面】壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】2層に細分できる。1層は黒褐色（5Y3/1）シルトで、2層はにぶい黄褐色（10YR4/3）シルトである。

【遺物】出土していない。

S E 3025 井戸跡（第3・4図）

【位置】調査区西側で確認した、素掘りの井戸跡である。

【重複】S X 3029 河川跡と重複し、それより新しい。

【平面形・規模】南北に長い楕円形であり、規模は長径2.4m、短径1.8mである。深さ約1mである。

【壁・底面】壁は上位が緩やかに立ち上がるが、中位より下は急角度で立ち上がる。底面は平坦であり西から東へ緩やかに落ち込む。

【埋土】2層に大別できる。大別1層（1層）は黒褐色（10YR3/1）シルトで黄橙色シルトブロックを多く含む。大別2層（2～6層）は灰色砂、灰黄褐色砂、黒褐色砂が主体で、黒褐色シルトブロックが全体的に混ざる。

【遺物】礫石が1点出土している（第6図）

S K 3026 土坑（第3・4図）

【位置】調査区中央付近で確認した。

【平面形・規模】円形で直径80cmである。深さは34cmである。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

【埋土】3層に細分できる。1層は黒褐色砂（10YR3/2）ブロックが混じる黒色粘土（10YR1.7/1）、2層は黒褐色シルト（10YR3/1）、3層は黒色粘土（10YR1.7/1）ブロックが混じる褐灰色砂（10YR4/1）である。

【遺物】土師器甕（B類）が出土している（第6図）。

S K 3027 土坑（第3・4図）

【位置】調査区中央付近で確認した。

【平面形・規模】南北に長い楕円形で、長径1.6m、短径1mである。深さは50cmである。

【壁・底面】壁は底面から急角度で立ち上がる。底面はやや丸く窪む。

【埋土】7層に細分できる。黒褐色粘土が主体であるが、6層は灰黄褐色細砂（10YR4/2）ブロックを含み、2層は灰黄褐色細砂（10YR4/2）、7層は褐灰色細砂（10YR4/1）である。

【遺物】出土していない。

S K 3028 土坑（第3・4図）

【位置】調査区北側で確認した。

【重複】重複はしていない。

【平面形・規模】調査区外へ延びており、検出した部分は円形を呈している。規模は直径2.75m、深さは70cmである。

【壁・底面】壁は斜めに立ち上がり、上位で段差が生じる。底面はほぼ平坦で、わずかに丸く窪む。

【埋土】2層に大別できる。大別1層（1～4層）は黒褐色粘土、黒褐色細砂が主体である。大別2層（5～7層）は黄色灰色細砂、暗オリーブ褐色砂が主体である。

【遺物】土師器小片が出土している。

S X 3029 河川跡（第3・4図）

【位置】調査区西側で確認した。

【重複】S E 3025 井戸跡と重複しており、それより古い。

【規模・方向】方向は北で西に33度偏っており、調査区南壁から北西方向へ内湾気味に伸びている。検出した長さは14.8m、上幅は1～2m、深さは14cmである。

【形・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で緩やかに窪んでいる。

【埋土】2層に細分できる。1層は黒褐色（10YR3/2）シルトで、2層は灰黄褐色（10YR4/2）粘土である。

【遺物】土師器小片が出土している。

P 1

【位置】調査区中央で確認した柱穴である。

【重複】SD 3022溝跡、P 2と重複し、SD 3022溝跡より新しくP 2より古い。

【規模・平面形】南北にやや長い楕円形で、長径72cm、短径56cmである。深さは40cmである。

【壁・底面】壁は底面からほぼ直角に立ち上がり、底面は平坦である。

【埋土】3層に細分できる。1層は黒色（10YR2/1）シルトで外周に灰白色火山灰が堆積する。2層は黒褐色（10YR3/2）シルトで、3層は暗褐色（10YR3/3）砂である。

【遺物】土師器甕（A類）、土師器甕（B類）が出土している。

P 2

【位置】調査区中央で確認した。

【重複】P 1 と重複し、それより新しい。

【規模・平面形】円形で直径 22cm である。深さは 20cm である。

【壁・底面】壁は底面からほぼ直角に立ち上がるが、南側の壁は外側にやや外轉する。底面は平坦である。

【埋土】3 層に細分でき、黒褐色シルトが主体である。

【遺物】土師器甕（B 類）が出土している。

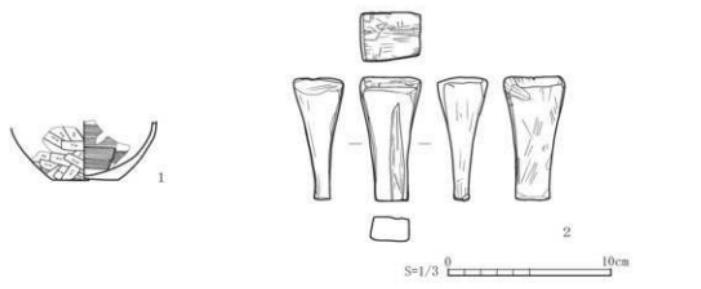
3まとめ

新田遺跡 143 次調査では遺構・遺物は発見されなかった。山王遺跡第 222 次調査では基盤層となる II 層上面で溝跡 4 条、井戸跡 1 基、土坑 3 基、河川跡 1 条、ビット 2 基を確認した。出土遺物から年代はおそらく古代の範疇に収まるものと思われる。

また、確認調査において古代の遺構確認面の下層より、古墳時代の水田層と土質が類似している黒色粘質土層が確認されており、古墳時代の遺構がある可能性が考えられていた。今回の調査でも下層の遺構を確認するため 3ヶ所で深堀を行った。しかし、黒色粘質土層に対応する VI 層では畦畔などの遺構は確認できなかった。

参考文献

多賀城市教育委員会 「新田遺跡第 138 次調査・山王遺跡第 216 次調査」『多賀城市内の遺跡 2 平成 31 年度ほか発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第 144 集 2020



(単位 : cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	土師器甕	S K 3027	-	ヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラナデ	-	4.1 24/24	3.6	R1	B 類
2	砾石	S E 3025	1 層	擦痕有	-	長 7.6	幅 4.3	厚 3.0	R2	

第 6 図 出土遺物

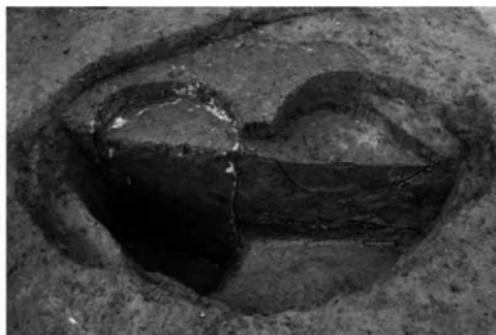
写真図版 1



1 山王遺跡第 222 次調査
調査区全景（西から）



2 S E 3025 井戸跡断面（西から）



3 P 1・P 2 断面（南東から）

写真図版 2



1 A-A' 断面（南から）



2 B-B' 断面（南から）



3 C-C' 断面（南から）



1 SK 3026 土坑出土
土師器壺 (R 1)



2 SE 3025 井戸跡出土
砥石 (R 2)

IV 市川橋遺跡第100次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、市川字館前の公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和元年11月29日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財とのかかわりについて協議書が提出された。この計画は、公園内に公衆トイレを建設するもので、浄化槽設置工事に伴い、一次処理槽部分で3.26m、消毒貯留槽部分で3.21m、土壤浸潤槽部分で1.2mの掘削を実施するというものであった。

申請地周辺では、平成16年度に第45次調査を実施しており、現地表から1.7m下で、古代遺構を発見しているため、土壤浸潤槽部分は遺構面まで達しない可能性が高く、しかも狭隘であるため、対象から除外することができるが、一次処理槽及び消毒貯留槽部分は遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、やむを得ず発掘調査による記録保存を行うことになった。

その後、6月30日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、7月6日には重機による表土の掘削を開始した。浄化槽設備が2箇所あるため、北側に位置するトレーニングをA区、南西に位置するトレーニングをB区とした。7月7日にA区の全体の清掃及び遺構の検出作業を開始した。土坑等を2基、ピットを9基発見し、7月31日に測量、写真撮影を終え、8月3日からB区の清掃及び遺構検出作業を開始した。土坑2基、ピット3基を検出し、写真撮影、測量を実施し、8月19日に、器材の撤収を行い、調査を終了した。

2 調査成果

(1) A区 基本層序（第4図）

A区の基本層序は以下の通りである。

I層：公園整備のための盛土層。

II層：オリーブ黒色（10Y3/1）の粘質シルト。公園整備前の表土。

III層：オリーブ黒色（7.5Y3/1）の砂質シルト層。上層の遺構確認面。

IV層：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂質シルト層。オリーブ黒色土混入する。

V層：暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂質シルト層。下層の遺構確認面。

VI層：灰色（10Y4/1）の粗砂層である。

(2) A区 発見した遺構と遺物

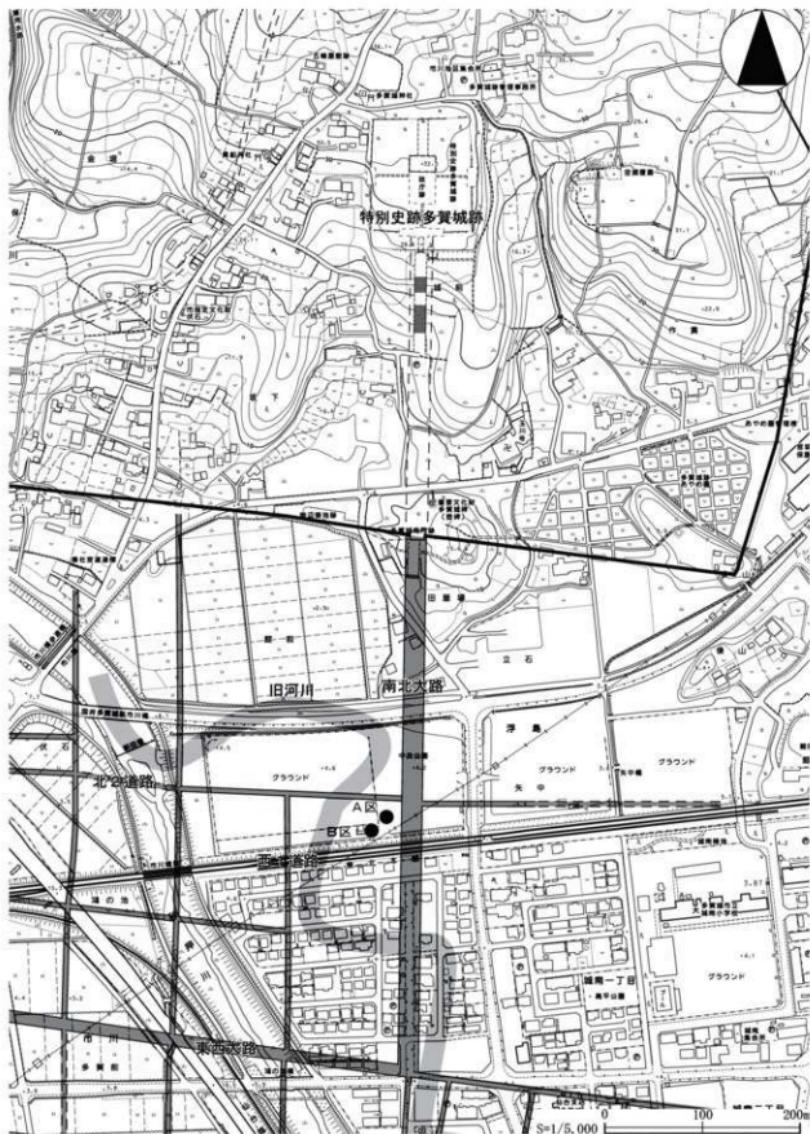
A区で発見した遺構の内、S X3616とSK3617の確認面は、III層上面であるが、それ以外の遺構は、すべてV層上面で検出したものである。ピット1・2、4～7は建物などの柱穴とみられるが、建物や柱列として組み合うものはなかった。

S K3617土坑（第3・5図）

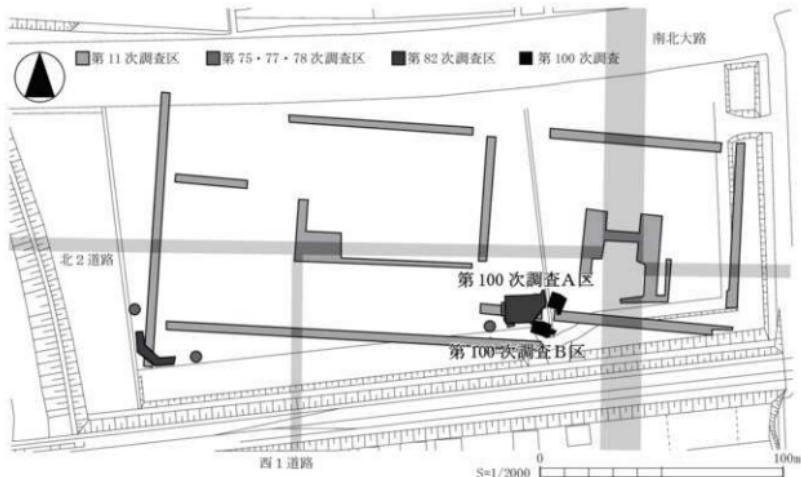
【位置】A区北東で検出した。

【重複】S X3616と重複しており、それより新しい。また、ピット9とも重複しており、本遺構の方が新しい。

【方向・規模】遺構北側及び西側が調査区外にあるが、確認した範囲で規模は東西約3m、南北約1.6mある。壁は比較的急に立ち上がり、深さは約30cmあり、底面は平坦である。



第1図 調査区位置図



第2図 第100次調査及び周辺調査トレンチ配置図

【埋土】6層に分層でき、自然堆積層である。

【遺物】図示していないが、埋土中から、近世から近代の磁器や陶器が出土している。

S K3616土坑（第3・4図）

【位置】A区北西で検出した。

【重複】S K3617、ピット8と重複しており、S K3617より古く、ピット8より新しい。

【方向・規模】遺構の東側がS K3617に壊されており、また、北側、西側が調査区外にあるため、平面の規模は不明である。深さは、調査区西壁で確認すると約60cmあり、壁はなだらかに立ち上がってい。

【埋土】調査区内では6層に分層できる。

【遺物】上層から須恵器の高杯（第9図6）、円面鏡（第9図7）、底面から土師器壊（B V類・第9図1）が出土している。

ピット1（第3・5図）

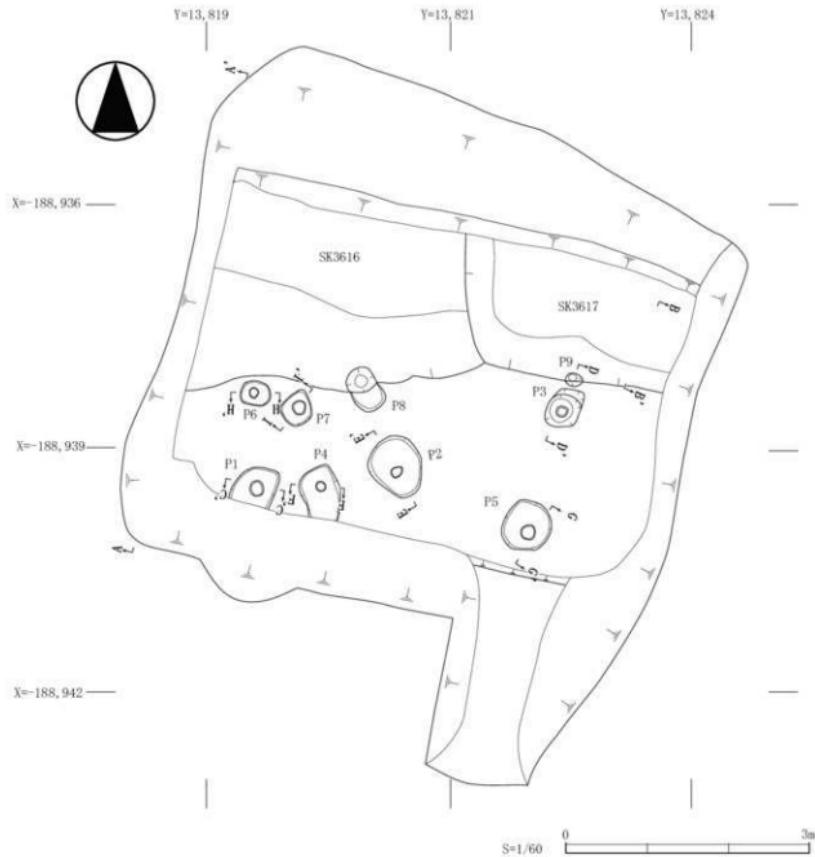
【位置】A区南西、V層上面で確認した。

【方向・規模】規模は、東西方向で約50cm、南北方向で遺構南側が調査区外にあるため不明である。壁は急に立ち上がってい。

【埋土】掘り方は2層に分層でき、図5の1層は、柱痕跡である。

【遺物】土師器壊、須恵器壊の小片が掘り方の埋土から出土している。

ピット2（第3・5図）



第3図 A区遺構平面図

【位置】A区南側中央西寄りで検出した。

【方向・規模】長軸で約80cm、短軸で約60cm、深さは確認面から約10cmである。

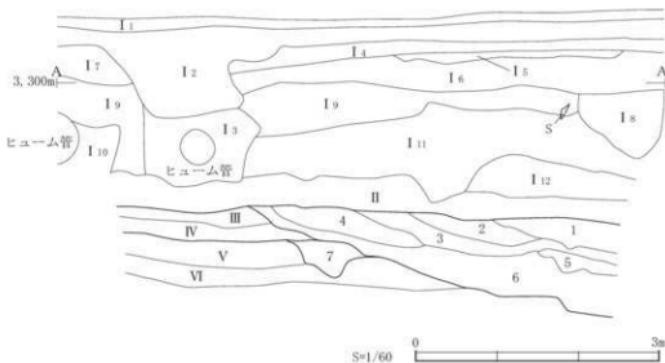
【埋土】掘り方は2層に分層でき、1層は柱痕跡であり、木質が残っていた。

【遺物】土師器壺、須恵器小型の甕の小片が出土している。

ピット3（第3・5図）

【位置】A区中央東側、V層上面で確認した。

【方向・規模】長軸約50cm、短軸約40cm、深さ約40cmある。壁は急に立ち上がっており、北側に小さな段がある。



部位	遺構	土色	土性	備考
1		灰色 (3Y4/1)	粘土	粘性あり。しまりあり。炭化物少量含む。
2		灰色 (3Y4/1)	粘土	粘性あり。しまりあり。
3	SX9616	黒褐色 (2, SY4/1)	粘質土	粘性あり。しまり強い。
4		暗オリーブ灰色 (BGY4/1)	粘質土	粘性あり。しまり強い。
5		灰色 (7, SY4/1)	砂質土	粘性あり。しまりあり。炭化物含む。
6		灰色 (3Y4/1)	粘質土	粘性あり。しまりあり。緑黒色粘質土含む。
7	ピット	暗オリーブ灰 (2, 5G6/1)	砂質土	粘性ややあり。しまりあり。

第4図 A区西壁断面図

【埋土】3層に分層でき、1・2層は灰色の粘質土で、3層は暗オリーブ灰の砂質土である。

【遺物】1層から平瓦が出土している（第9図8）。

ピット4（第3図）

【位置】A区南西部で確認した。

【方向・規模】遺構南側が調査区外にあり、長軸は不明である。短軸は約45cm、深さは遺構確認面から約5cmである。

【埋土】掘り方は2層に分層でき、1層は柱痕跡である。

【遺物】土師器壺の小片、須恵器甕の破片が出土している。

ピット5（第3・5図）

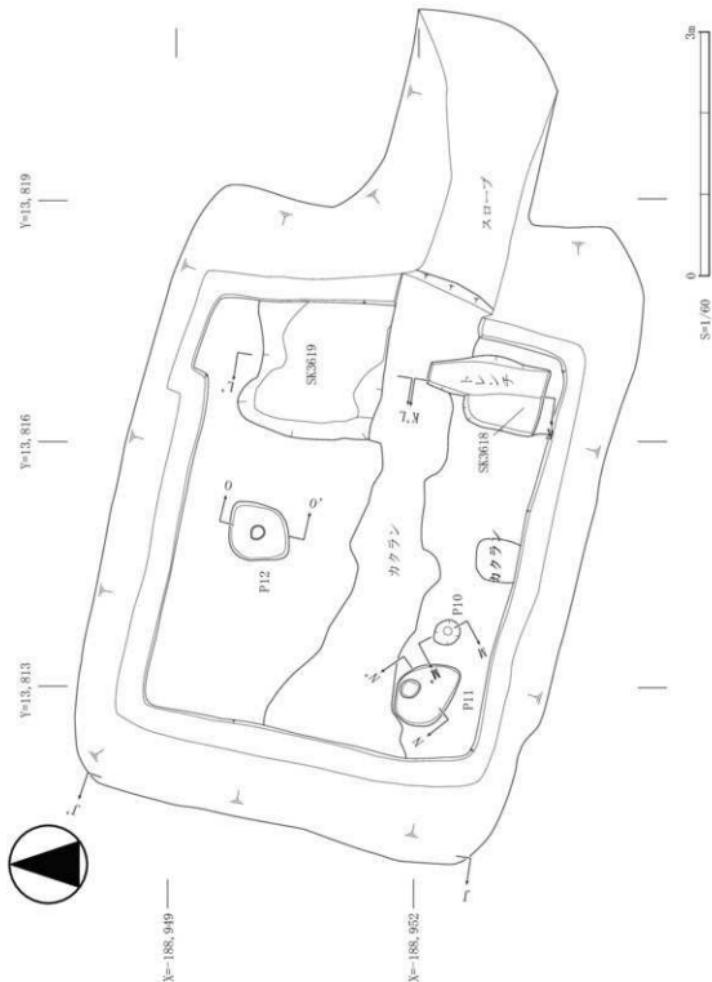
【位置】A区南東部で確認している。

【方向・規模】ほぼ円形に近い形状をしている。長軸約65cm、短軸約60cm、深さは遺構確認面から約30cmある。壁は急激に立ち上がっている。

【埋土】掘り方は2層に分層でき、1層は柱痕跡である。

【遺物】埋土中から須恵器の壺（II類、第9図5）が出土している。他に、図示していないが、土師器甕、須恵器甕の破片が出土している。

第6図 B区遺構平面図



ピット7（第3・5図）

【位置】A区南西部で検出した。

【方向・規模】長軸約40cm、短軸約35cm、深さは遺構確認面から約20cmある。

【埋土】掘り方は単層で、1層は柱痕跡と推測される。

【遺物】土師器の小片が出土している。

（3）A区 遺構外遺物（第9図）

A区では、土師器壺、甕、須恵器壺、甕、古代の瓦などが出土している。土師器小型甕（第9図2）は、外面、内面共に摩滅しており、内面には漆のようなものが付着している。須恵器甕（第9図4）は、底部回転ヘラケズリした後、高台を貼り付けている。

（4）B区 基本層序（第7図）

I層：公園整備のための盛土。

II層：オリーブ黒色(10Y3/1)の砂層。

III層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)の砂層。

IV層：オリーブ灰色(5GY5/1)の砂層。

V層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)の砂層。遺構確認面である。

VI層：オリーブ灰(2.5GY5/1)の砂層。

（5）B区 発見した遺構と遺物

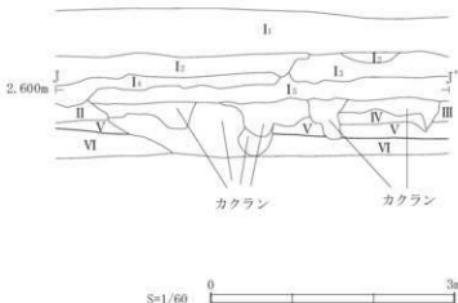
S K3618土坑（第6・8図）

【位置】B区南東部で確認している。

【方向・規模】遺構南側及び東側が調査区外に延びており、平面の規模は不明である。

【埋土】2層に分層でき、にぶい黄褐色土であった。

【遺物】出土していない。



第7図 B区西壁断面図

【埋土】掘り方は2層に分層できる。2層は柱痕跡と考えられる。

【遺物】出土していない。

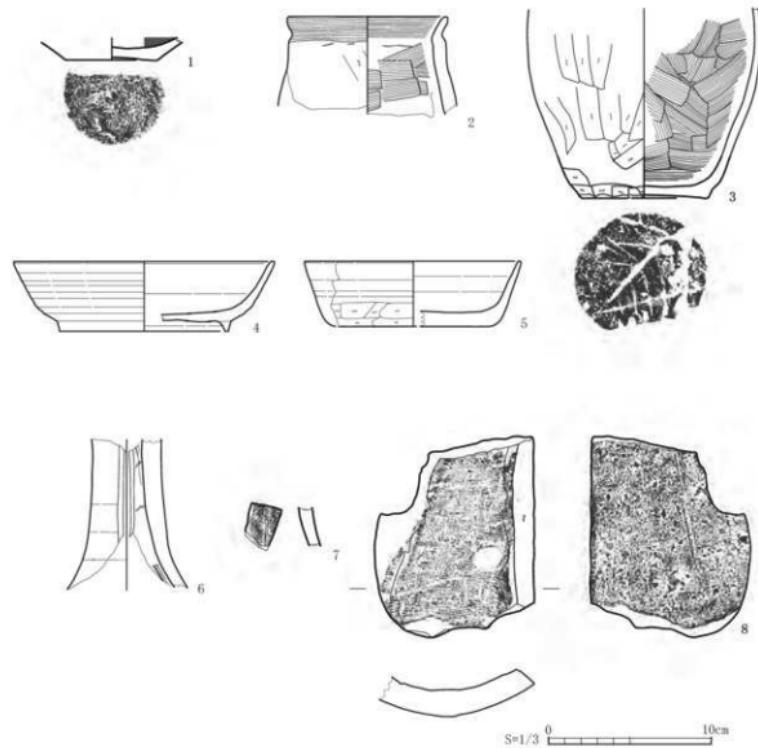
(6) B区遺構外遺物 (第9図)

B区では、図示していないが、遺構外から土師器壺、須恵器甕、古代の瓦が出土している。また、小片ではあるが、灰釉陶器皿が出土している。

3まとめ

今回の調査で、A区では、遺構確認面が2面あることがわかった。

A区V層上面で9基のピットを確認しており、その大半で柱痕跡が確認されたことから、掘立柱建物、あるいは柱列の存在を想定することができる。それより新しいSK3617とSK3616によって、建物や柱列としての組み合わせを明らかにすることはできなかった。年代については、ピット5の掘り方から8世紀ごろの須恵器壺が出土しているので、古代の遺構であると推測される。



(単位: cm)

番号	種類	出土遺構	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 壺	SX3616	摩滅が激しく不明 底部: 回転条切り	ヘラミガキ→黒色処理	-	5.8	-	-	R8	B V類
2	土師器 甕	A区	口縁部: ヨコナデ 確認面 体部: ヘラナデ	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラナデ	(9.8) 6/24	-	-	-	R3	A類 内面に付着物あり
3	土師器 甕	SK3619	体部: ヘラケズリ 底面: 本葉底	ヘラナデ	- 24/24	8.0	-	1-8	R15	A類
4	須恵器 壺	A区	ロクロナデ 確認面 底部: 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(16.0) (10.4)	3.8	1-7	R1	I類	
5	須恵器 壺	ピット5	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.2) 3/24	(9.8) 6/24	4.0	1-6	R11	II類
6	須恵器 高壺	SX3616	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	-	-	R5	
7	円面鏡	SX3616	平行割線		-	-	-	-	R6	
8	平瓦	ピット3	布目底	ヘラナデ	-	-	-	-	R10	

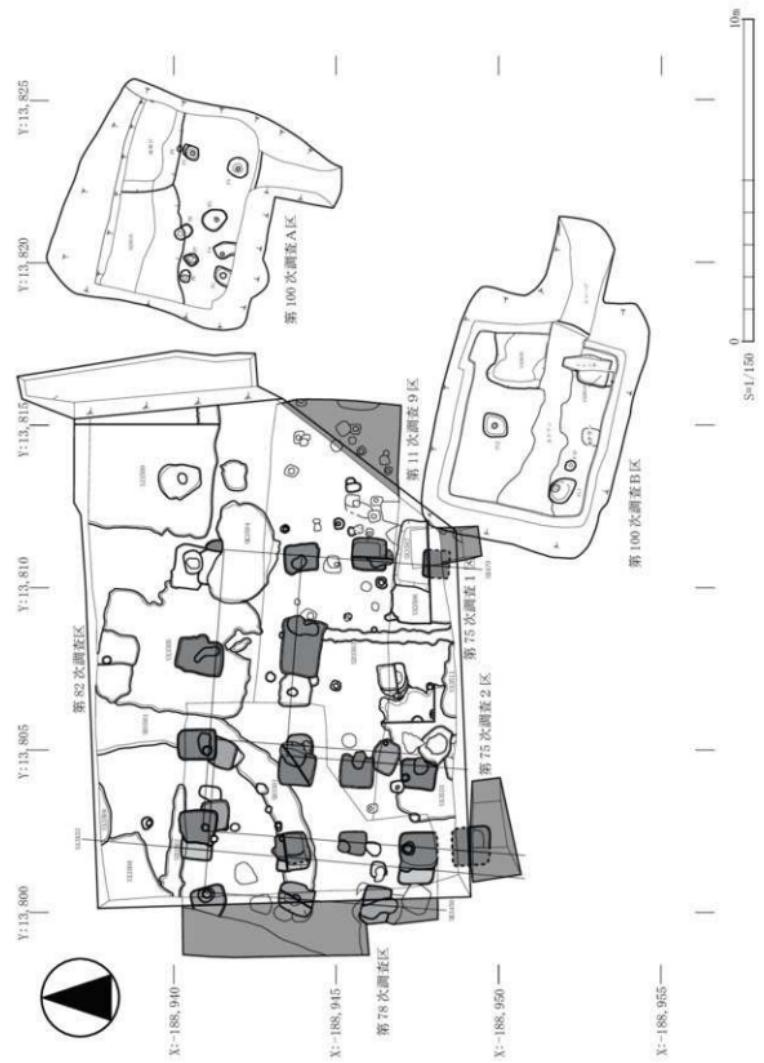
第9図 出土遺物

A区Ⅲ層上面で、SK3617を検出しており、近代の陶磁器が出土している。SK3616は、SK3617によって壊されているので、SK3617よりも古い遺構である。また、これらの遺構を検出したⅢ層は、8世紀以降の遺構を検出しているV層より上層なので、SK3616は、8世紀以降近代以前の遺構としかいえない。

B区において、遺構確認面は1面であった。B区においても、A区と同様ピットを検出したが、遺物が出土しておらず、ピットの詳細な時期は不明である。しかし、遺構確認時には古代の土師器や須恵器や瓦が出土しているので、古代の遺構と考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会2014『多賀城市内の遺跡1-平成23年度発掘調査報告書-』多賀城市文化財報告書第116集



第10圖 周邊調查區合成圖



1 A区完掘状況（西から）



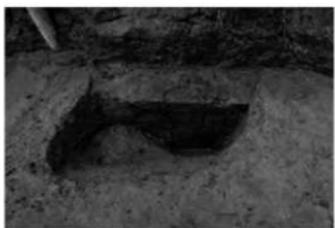
2 A区遺構検出状況（西から）



1 A区ピット検出状況（東から）



2 ピット6・7検出状況（東から）



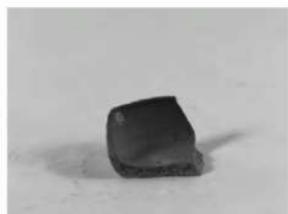
3 ピット1断面（北から）



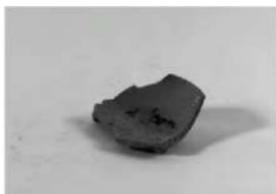
4 ピット6断面（南から）



5 B区完掘状況（西から）



6 ピット5出土 須恵器坏（R11）



7 確認面出土 須恵器坏（R1）



8 S X3619出土 土師器壊（R15）

写真図版2

V 高崎遺跡第124次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、留ヶ谷一丁目地内で計画された宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和元年6月27日、地権者から当該事業計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。この計画は、約4,000m²の敷地に幅6.0mの道路を建設し、宅地13区画を造成し、北東部の斜面に擁壁を設置するというものである。工事の内容は、現地表に2mの盛土を行った後、道路部分には給排水管を埋設するため最大幅約1m、最大深度約1.5mの掘削を行い、擁壁工事は最大幅約4.5m、最大深度約80cmの掘削を実施するものであった。

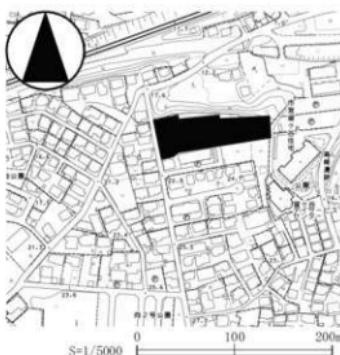
今回の対象地南側で、平成18年に第56次調査で古代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土器埋設遺構、須恵器窯跡などを発見し、東側隣接地の平成8年の第19次調査においては、縄文時代から中世に及ぶ遺構・遺物を発見している。当該地区も遺構・遺物が分布していることが予想された。

今回の対象地は、すでに集合住宅が建設されており、それらの影響が地下の遺構へ及んでいることが予想された。そのため、遺構の有無、残存状況を把握するため、確認調査を実施することになった。

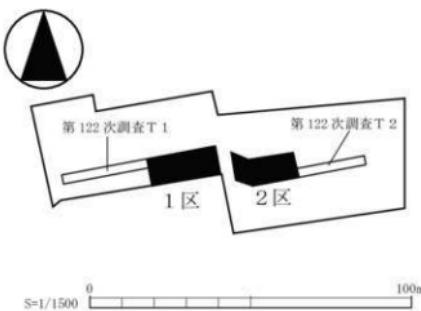
令和元年9月24日、地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、9月27日から第122次調査では、対象地区西側に設定したT1東端部から近代の送電線基地にかかる施設を確認し、対象地東側に設定したT2において小ピットを確認した（多賀城市教育委員会2020）。

これらの地点は、今回の開発計画により、破壊される可能性が高いことから、本発掘調査が必要と考えられた。そこで、申請者と協議を行い、受託契約を締結して、本発掘調査を実施することになった。

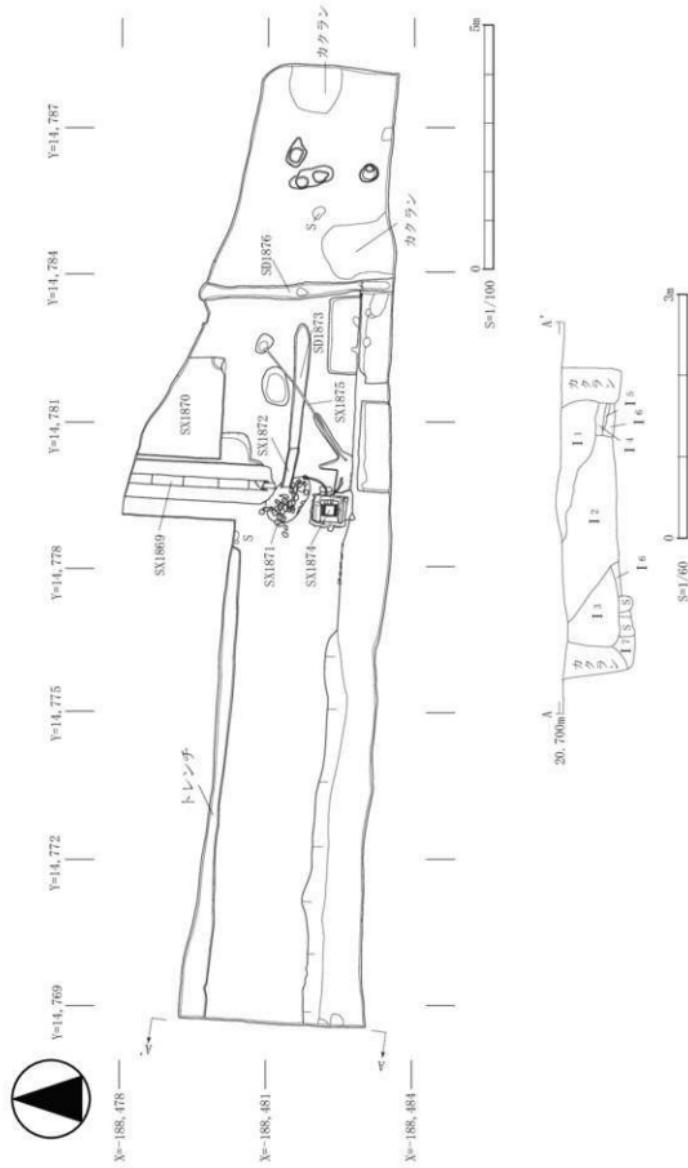
令和2年6月1日、重機による表土除去を行い、6月3日から作業員を導入し遺構検出作業を開始した。1区では、確認調査で検出した送電線基地にかかる施設の続きを発見し、6月11日に1区の全景の写真撮影、測量を終了した。12日から2区の遺構検出作業を行ったところ、土管などが見つかり、22日までにこれらの写真撮影、測量を行った。23日、器材の撤収を行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図



第3図 1区遺構平面図・断面図

2 調査成果

(1) 1区 基本層序 (第3図)

遺構確認面まで、盛土であった。

I 1層：灰色 (7.5Y6/1) の砂質土である。

I 2層：黄褐色 (10YR5/6) の砂質土である。

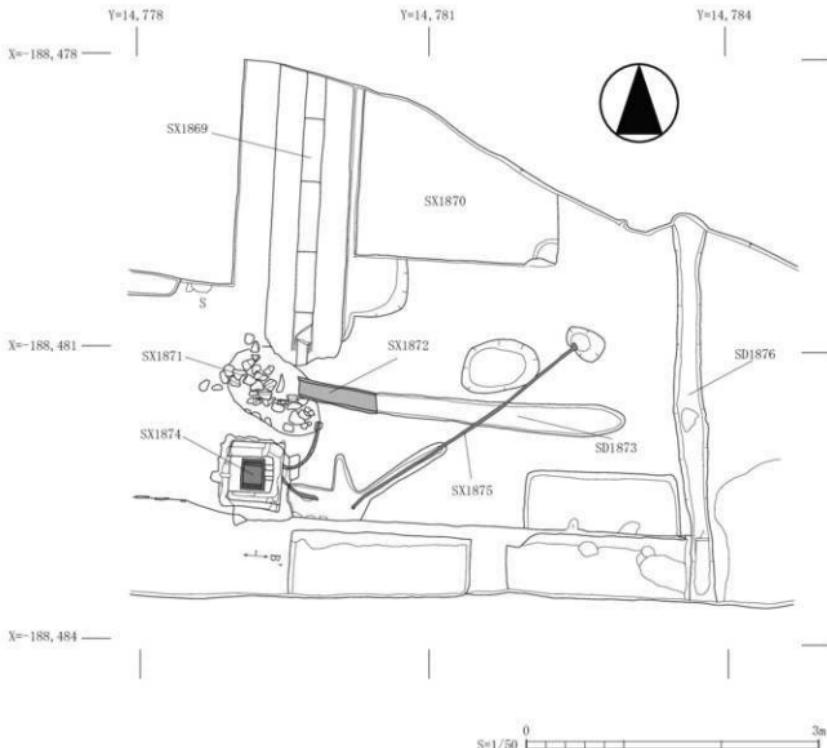
I 3層：褐灰色土 (10YR6/1) の砂質土である。

I 4層：黒褐色 (10YR2/2) の粘質土である。

I 5層：明黄褐色 (10YR6/6) の粘質土である。

I 6層：黄褐色 (10YR5/6) の粘質土である。

I 7層：灰色 (10YR7/1) の砂礫層である。

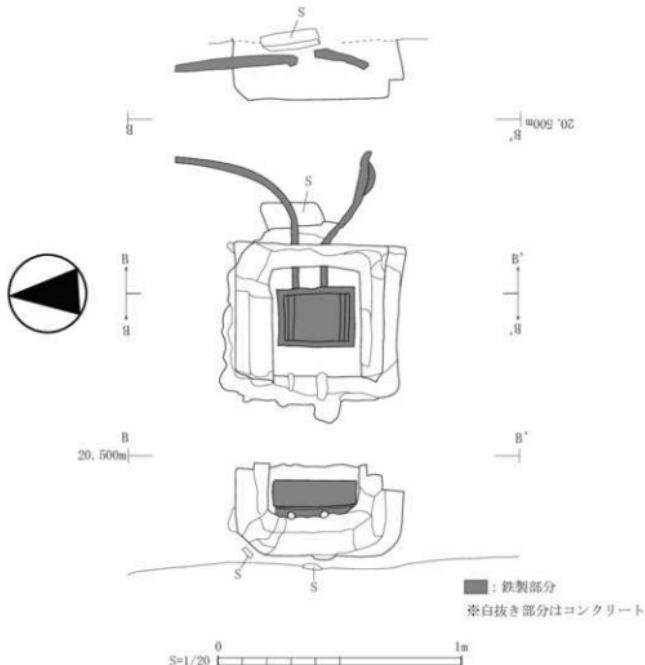


第4図 SX1869送電線関連施設平面図

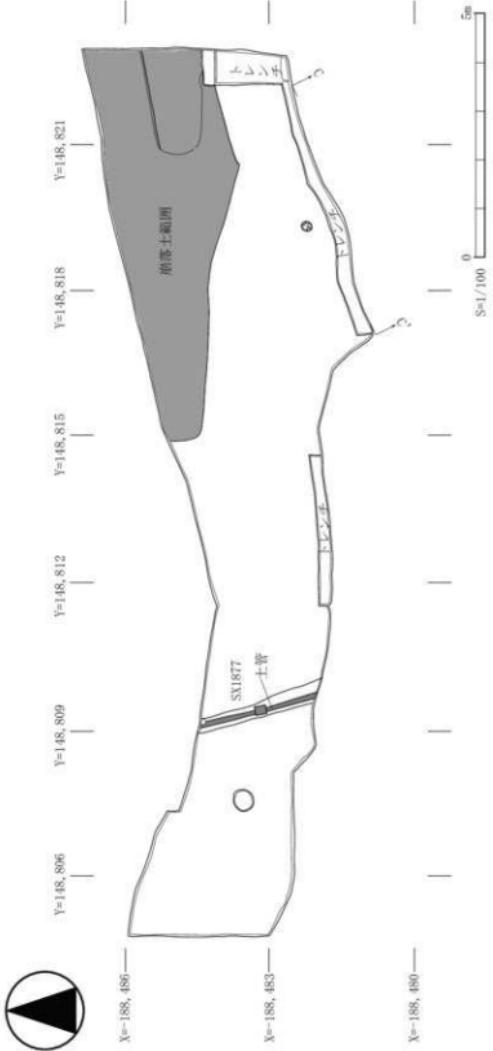
(2) 1区 発見した遺構

S X 1869送電線施設関連遺構（第4・5図）

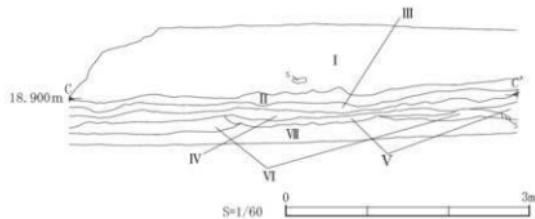
1区中央やや東寄りで確認した。遺構の北西で、中央に蓋のあるコンクリート製の桶状の遺構S X 1869を発見した。さらに、その東側に上面が平たんなコンクリート製の基礎と思われるS X 1870を確認した。これら2つの遺構は、調査区外北側に延びている。また、コンクリート製の桶状の遺構の南にはS X 1871集石遺構があり、その東側には、陶製のS X 1872桶がある。S X 1872桶からはさらに東へ続く溝状の掘り込み（SD 1873溝跡）がある。S X 1871集石の南には、コンクリート製のS X 1874橋が存在しており、鉄管がS X 1874の内部から東側へ突き出している。その北東では、先の鉄管の延長と思われる部分が土に埋もれた形で見つかっている（S X 1875鉄管）。S X 1874の南側にはコンクリートの基礎にした礫が多くみられた。また、これらの施設の東には南北に延びる幅約30cmのSD 1876溝跡を確認している。



第5図 S X 1874コンクリート橋展開図



第6図 2区道構平面図

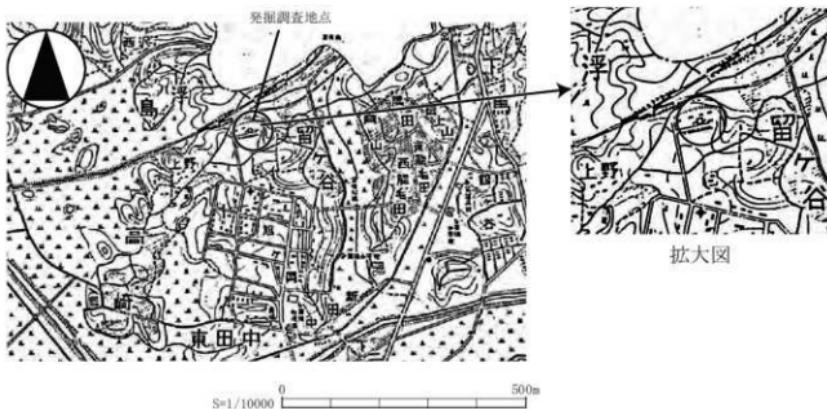


第7図 2区断面図

(3) 2区 基本層序 (第7図)

2区の基本層序は以下の通りである。

- I層：現代の盛土で、厚さ約80cmある。
- II層：褐色（10YR6/1）の粘質土で、厚さ約15cmある。
- III層：褐色（10YR5/1）の粘質土で、厚さ約10cmある。
- IV層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土で、厚さ約15cmある。旧表土。
- V層：褐色（7.5YR4/3）の粘質土で、厚さ約10cmある。
- VI層：明黄褐色（10YR6/6）の粘質土で、厚さ約20cmある。
- VII層：明黄褐色（10YR6/8）の粘質土で、厚さ20cm以上ある。



第8図 多賀城古地図（昭和34年頃）

(4) 発見した遺構

S X 1877土管（第6図）

調査区西側で確認している。南北方向で、陶製の土管が見つかっている。直径約10cm、長さは南北共に調査区外へ延びているため不明である。中央やや南寄りに繋ぎ目があり、2本の土管が連結されていた。本遺構と1区で検出した陶製の樋S X 1872とは同じ材質のものである。

3 まとめ

今回の調査地点は、昭和34年頃の多賀城の古地図において、送電線の地図記号が記されている（第8図）。そのため、今次の調査で検出した遺構は、近代の送電線基地にかかる施設と考えられる。2区で発見したS X 1877土管は、1区のS X 1872樋と同じ材質で出来ていることから、1区の東側で検出した遺構と2区で検出した土管は一連のものと推測される。よって、送電線施設にかかる遺構の範囲は、調査区1区の東側から調査区2区の西側、東西約22mの範囲で確認したことになる。

遺構の性格としては、コンクリート製や陶製と樋（S X 1869・S X 1872）と思われる遺構やコンクリートの樋（S X 1874）などを発見したことから、水などを処理する導水施設と考えられる遺構を確認したことになる。また、2区においてもS X 1877土管を発見しているので、これも導水に係わる施設であると思われる。

参考文献

多賀城市教育委員会2020『多賀城市内の遺跡2-平成31年度ほか発掘調査報告書-』多賀城市文化財報告書第144集



1 1区完掘状況（東から）



2 S X 1869検出状況（南から）



3 S X 1871集石遺構等検出状況（西から）



4 S X 1869樋状遺構（南から）



5 S X 1869・1870検出状況（西から）



6 S X 1874コンクリート構検出状況（西から）



7 2区完掘状況（西から）



8 S X 1877土管検出状況（南から）

報告書抄録

多賀城市文化財調査報告書第149集

新田遺跡ほか

新田遺跡第140次調査

新田遺跡第143次調査・山王遺跡第222次調査

市川橋遺跡第100次調査

高崎遺跡第124次調査

令和3年3月29日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町2番10号

電話 (022) 288-6123

